

# 麗澤教育

第10号

平成16年（2004）4月

特集：いまどき道德？いまこそ道德！



## 『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成7年より毎年1回発行しています。

# 麗澤教育 第十号 〈目次〉

〈フォト・アルバム〉この一年①

〈特別寄稿〉

学長に就任して……

梅田 博之……

麗澤教育の真価を発揮するとき……

廣池 幹堂……

6  
8

〈オピニオン〉

麗澤教育をどう考えるか

— 『麗澤教育』の十年を振り返って— ……

水野治太郎……

15

〈フォト・アルバム〉この一年②

〈特集〉「いまだき道德? いまこそ道德!」 ……

北川 治男……

21

麗澤大学における道德科学教育の現状と課題

— 教養教育と専門教育を貫く倫理道德教育を求めて— ……

北川 治男……

22

〔道德科学〕

① 「道德科学」授業の一端

— 課題「親に感謝の心を表す」について— ……

岩佐 信道……

28

黒川征一郎・張 群・梶本佳世子

② いのちをみつめて—道德科学の授業から……

欠端 實……

34

相原のり愛

③ 「道徳科学」教育の難しさ

—授業担当を終えるに当たって—……………森川 正大……………39

南 元美

④ 学生の関心を高めるために工夫を重ねて

……………山田 順……………44

⑤ 道徳科学の授業について

—考える力をつける—……………望月 幸義……………49

藤倉 文子・秋谷 典彦・小野 幸

小川健太郎・海老根 渉・大塚 美香

⑥ 自分で考える授業を目指して……………大野 正英……………54

高津亜祐美

〈フォト・アルバム〉この一年③

〔学部専門教育〕

① ケースを中心としたビジネスエシックス

—倫理的な推論能力を身につける—……………土屋 武夫……………60

② 情報倫理教育

—職能としての情報倫理、マナー、セキュリティ—……………大塚 秀治……………64

③ 環境文化研究

—「水」を通じて現代文明を省みる—……………犬飼 孝夫……………68

〔実践活動〕

①私を変えたボランティア活動……………劉海梅……………72

②プア〜出会いを大切に……………寺田祐子……………76

③寮生活を通して学んだこと……………宮崎めぐみ……………80

〈コラム① 温故知新・その二〉

—道徳科学専攻塾が発足……………池田裕……………84

〈コラム②〉

もう一つの麗澤教育

—考え方を変え自己能力を開拓せよ……………永安幸正……………88

〈麗大の今〉

①「二期一会」〜第四十回麗陵祭を終えて……………中澤正幸……………91

②伝統を紡ぐために—弓道部……………伊東徹真……………94

③アテネへ向けて……………国枝慎吾……………97

④麗澤のキャンパス、それは心のふるさと

〜わが喜びの出会い……………吉沢和人……………101

〈前編集長の覚え書き〉

『麗澤教育』の編集に、三年間携わって……………鈴木康之……………104

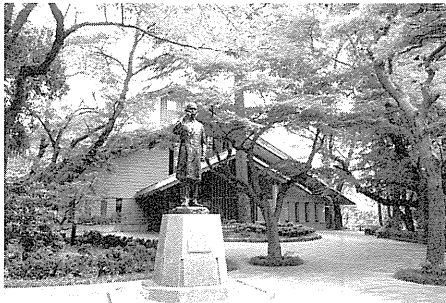
※寄稿して頂いた在学生の学年は、平成十五年度のものです。



平成15年度入学式。桜並木を  
新入生や保護者(2003.4.2)



平成15年度の入学式 (2003.4.2)



完成した廣池千九郎記念講堂。「落成披露の集い」(2003.5.23)



留学生歓迎懇親会でコーラスするドイツ留学生(2003.4.25)



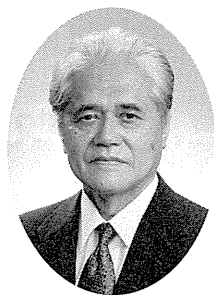
文化講演会で講演する中曽根元首相(2003.5.24)



留学生歓迎懇親会で梅田学長(右から3人目)と民族衣裳を着た留学生(2003.4.25)

## 学長に就任して

麗澤大学長 梅田博之



平成十五年四月に、学長を仰せつかり、正直なところ戸惑いもありましたが、麗澤大学に身を置くものとして麗澤大学のためにできる限りの力を尽くしたいという気持ちからお引き受けしました。従来、理事長の兼務であった学長職への教員の就任は、学問は本来自律的なものであって、学問を教える大学の運営も自律的に学問研究に携わる者たちに委ねることが大学の発展によりに違いない、との理事長のご決断によるものと私は解釈しています。それだけにその付託に違<sup>な</sup>うことのないように力を尽くさなければならぬと思います。同時に、このことは一人私だけの問題ではなく麗澤大学全体が受け止めるべ

き問題です。この大学に籍を置き、教育・研究に携わる専任教員全員がこの責任を自覚して、一人一人が、今後引き続いてこの大学の自律的な運営に責任を持たなければならないと考えていただきたいと思っています。

さて、私立大学の成立の要諦として、優れた創立者の存在、明確な建学の理念、そして教育理念を實現する場としての整備されたキャンパスの三つをあげることができますが、わが麗澤大学はこの三つの要素をすぐれて立派に備えた大学として誇ることができま

す。麗澤大学の教育は、建学の理念である「知徳一体

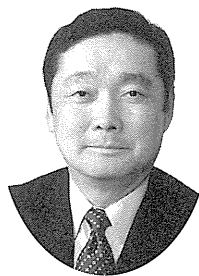
の教育」を、教養教育・専門教育を貫く倫理教育として具現化するとともに、語学教育・情報教育を重視しその基盤の上に立って専門教育を行うなど、「実生活に益する学問、実際的な専門技能を尊重」することによって、「高い品性と専門性を持ち、国際性豊かな人材を育成する」ことを目的としています。また、自然豊かな広大なキャンパスの中で、教職員は「師弟同行同学」による人格的感化の精神をたいして学生指導に当たっています。豊かな自然環境も学生たちの人格陶冶に役立つに違いありません。建学の理念の下、学部四年間・大学院二年<sup>ないし</sup>乃至五年間の教育を通じて、上に掲げた目的の達成に力を尽くし、その成果を世に問うことによって、麗澤大学の存在意義を世に示したいと思えます。そのためには、学部、研究科、図書館、その他の各部署でも、それぞれの分野や専門に従って、建学の理念に沿って各部署ごとの目的と目標を定め、その達成のために努力することが必要となります。そして、このことは、今年度から義務化される大学の第三者

評価にも重要な原則として関わってきます。

大学冬の時代ともいわれる、厳しい状況の中で、麗澤大学が小粒でもピカリと光るような、特色ある教育を行う、魅力ある大学として存在感をアピールできる、よい施策をいろいろと考えていかなければなりません。建学の理念の教育・研究の実際的な場に則した具体化・具現化をなお一層推進することが基本的に重要であると思えます。



## 麗澤教育の真価を發揮するとき



廣池学園理事長 廣池 幹 堂

### 創立者の胸像設置と麗澤教育

昨年（平成十五年）九月、大学一号棟に創立者・廣池千九郎（一八六六一一九三八）の胸像を設置いたしました。これはモラロジー研究所創立七十五周年記念事業の一環として大学に寄贈されたものです。九州芸術工科大学名誉教授・彫刻家の赤堀光信氏の芸術作品です。氏は、昨年五月に完成した廣池千九郎記念講堂前に設置してある創立者銅像の制作者、故赤堀信平氏のご子息です。

光信氏は、除幕式で「父が制作した銅像は社会教育者としての博士が右手を掲げ、私の後についてこ

い」と力強い姿をイメージしているのに対し、胸像は学者としての博士が真理を探究する姿をイメージした」と説明しておられます。親子二代にわたり創立者の像を制作していただいたご縁に深く感謝しております。

胸像の背後の壁には、これまで二号棟に掲げてあった「大学之道在明明徳」（『大学』）の聯を掲げました。昭和三十四年（一九五九年）、麗澤大学の開学式で初代学長の廣池千英は、この聯れんの意味するところを次のように説明しています。

「大学の使命は、大学之道は明徳を明らかにするに在り」である。すなわち道德の最高原理にのっと

り、この最高原理を植えつけて、その精神の上に現代の科学と知識とを十分に教え込んでいく、知徳一体の人材を養成するところにある」

さらに「麗澤とは易の語にして太陽天に懸りて万



1号棟に設置された創立者・廣池千九郎の胸像

物を恵み潤ほし育つる義なり」の聯も掲げました。麗澤の「麗」には、明るく、公平無私な心、すべての人を育む心という意味があり、創立者は、太陽のような光明（知恵）と温熱（慈悲）を持った人間を育てていくことを示したのです。

このように創立者の胸像が設置され、麗澤教育の核心を示した聯が掲げられた、この場所は麗澤大学の過去・今日・未来を象徴するものと言ってよいであります。創立者の事蹟ならびに業績を展示している、廣池千九郎記念講堂内に併設された記念館とともに、本学の原点を確認する場であります。

### 創立者の学者としての業績

廣池学園とモラロジー研究所を創立した廣池千九郎は、「モラロジー（道徳科学）」に基づく学校教育と社会教育によって、生涯学習さらには累代教育の実践をめざしました。また創立者は新しい学問分野「東洋法制史」を開拓したほか、数々の学術的貢献をしています。「真理を探究した学者」としての一

面をご紹介したいと思います。

昨年十月、北京人民大学孔子研究院院長の一行が、廣池千九郎記念館の見学に見えました。創立者の蔵書を見学すると、「ここは宝の山ですね。中国にもない儒教関係、孔子関係のすばらしい書物がある。ぜひ、このの図書目録だけでもいただきたい」と一行が驚きの声をあげたといっています。

中国では孔子の見直しが始まっており、来日の折に孔子関係、儒教関係の文献を探しにこられたのです。さらに『支那文典』『大唐六典』だいぢうりくてん、『和漢比較律疏』『東洋法制史序論・本論』等、創立者の学問的業績を紹介すると、「中国の法律、思想、文化について、こんなにも詳しく学術的に研究した日本人が存在したのか」と驚かれたそうです。

「東洋法制史」という言葉は、創立者が初めて使用した学術語です。廣池は、明治三十五年（一九〇二年）、早稲田大学で「東洋法制史」の講座を日本で初めて開講しました。後に東洋法制史研究で博士号を取得しますが、学位授与を告げる官報には、

「この種の研究において前人のいまだなさざることろをなし、学界に裨益を与うるの鮮少なからざること

は疑いを容れざるところなり」とあります。

当時、学位は国家より授与されるもので、特に法学博士号は「難事中的難事」とされていきました。恩師であり、東洋法制史の研究を勧めた法学博士穂積のふしけ陳重氏は、

「その内容は考証が精密で議論は着実、あくまで研究態度が真摯だったので、それが審査委員の意に合ったようです。したがって審査委員の報告は期せずして一致しており、投票は全部白票でした。これは学界未曾有のことで、実にご主人の名誉は、学者としてこのうえもなきことと考えます」と称えています。

### モラロジーの研究に着手

学歴、学閥もない中、独力で東洋法制史を研究し、難関の法学博士号を取得した廣池には、大学や研究機関から引く手あまたの誘いがありました。しかし、

これまで酷使してきた身体は限界に達して、生死の境を彷徨う大病にかかってしまい、その後半生は大転換します。

「小生の前半生は正義を道徳の標準と致し、その内面生活においてはいかなる場合にも忍耐・克己・堅忍・持久して勤勉力行し、またその外面生活においては破邪顕正し奮闘致しおり候。その結果は一方

にはやや事業に成功したれども、一方には肉体大いに衰弱致し候。すなわち一部の成功は得たれども全体の幸福は失えり」（明治四十二年＝一九〇九年）

このような反省から、創立者は人間の生き方の指針として、また人類の平和と幸福を実現する標準として、普遍的な道徳の確立が不可欠であると考えようになりました。これまでの専門分野の研究を超えて、今で言う学際的な研究へと進み、「人生の幸福学、世界平和の専門学としてのモラロジー」の研究に着手します。

そして昭和三年（一九二八年）、これまでの学問研究の集大成として、『新科学としてのモラロジー

を確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』（以下『道徳科学の論文』）が刊行されます。東西の聖人の思想・道徳に共通する「最高道徳」を提唱し、当時の最先端の人文科学・社会科学・自然科学によって、人類社会は道徳の進歩とともに発展してきたことを示し、さらに道徳実行の効果を証明しようというものです。

創立者は、自然科学が発達して合理的な思考が浸透した時代において、道徳教育が相変わらず「何々すべきである」という教訓だけでは、あまり効果をあげることができないと考えていました。ですから道徳の実行が他人を利用するだけではなく、真に自己のためになること——仏教の言葉では「己利」——を学問的に示そうとしたのです。

平成十四年（二〇〇二年）には、『道徳科学の論文』の英訳が完成して、世界の主な大学と研究施設に贈呈しました。

平成十三年（二〇〇一年）に刊行された『伝記廣池千九郎』には、創立者の学者としての業績、モラ

ロジック研究の過程が分かりやすく描かれており、現在、海外の要望に応えて英訳が進められているところ です。

## 二十一世紀こそ知徳一体の教育を

創立者は、教育者として世に出た青年期のころから道徳教育に熱心に取り組みました。義務教育の普及のために、夜間学校の設立や教員互助会の設立に奔走する中、「小学修身用書」（明治二十一年＝一八八八年）を執筆しています。これは単なる教訓ではなく、近隣の道徳的に優れた人物——女性もその中に多く含まれている——を紹介することで道徳実行を促すものでした。

また明治の近代国家づくりが、「物質文明（知識のこと）」は進んだが、「精神的の文明（道徳のこと）」が忘れられようとして見えており、「現代において、一面には盛んなる物質的文明の成功を見たれど、他の半面においては全く精神的に失敗し、国家の存在を危うくし、且つ全人類の真の永遠の平和

及び真の文化の建設を妨ぐることになっておるのです」と指摘しています。

さらに、『道徳科学の論文』では、東西の古典からペスタロッチをはじめ近代の教育思想の研究を踏まえて、「今日、全世界の教育の原理・目的及びその方法は、ただ単に物質を得る方法を教うるのみにして、人間として (as men) の人間を造ることをば忘れておるのであります」と、近世の「知育偏重」教育について批判しています。

「富の獲得とか体力の養成とか知性や正義に関係のない単なる才気とかを目的とした教育ではなく、徳の教育こそが教育の名に値する」（プラトン）、  
「二国を高めるもの、一国を強めるもの、そして一国を盛んにするものは、品性において一流の人々である」（スマイルズ）、  
「天爵を修めて人爵これに従う」（孟子）などを引用して、「知徳一体」の人間育成こそ真の教育であると説いています。

今日、日本だけでなく世界中が大きな転換期にあり、いろいろな改革が進められています。けれども、





2003年5月に完成した廣池千九郎記念講堂の記念館には、博士の研究業績などが展示、紹介されている

単なる改革のための改革に終わっては何もありません。また、発達する諸科学の成果を悪用されると、かつてでは考えられないような大きな被害を人類社会は受けることとなります。「知徳一体」の人間育成を進めるとともに、あらゆる制度に道徳を入れて

いかなければなりません。

「人間の精神から生み出されたところの政治、法律、教育、産業、経済の組織（すなわち制度）もしくは運用法をいかに変化し、改造し、もしくは革命を行うても、道徳を入れずして決してその事業を真に改良、進歩、進化させることはできません。従ってその関係者及び一般社会の人々に、真の永久的な安心、平和及び幸福を与えることはできません」  
（昭和七年＝一九三二年）

#### 麗澤教育の中核である麗澤大学

麗澤大学は、平成十五年度に大学院比較文明文化専攻が完成年度を迎えました。平成四年の国際経済学部の開設に始まり、各研究センター・大学院・国際産業情報学科の開設、そして昨年五月の廣池千九郎記念講堂完成と、この十数年間続いてきた改革に一区切りがつき、一応、総合大学として最小限の体裁が整いつつあると言えましょう。

本学は、学生総数三千二百名（内世界の二十の国

や地域から五百名を超える留学生)の規模となり、教育・研究ともに高い評価を受けております。しかし、創立者の大学構想から見れば、その一部を実現したに過ぎません。麗澤教育の中核である本学のさらなる発展には、教育・研究ならびに施設・設備の充実、それを可能にする財政基盤の確立が必要です。

一方、少子化・情報化・国際化への対応、国公立大学の法人化による競争の激化等、大学を取り巻く環境は大変厳しさを増しております。そこで平成十五年度から学長にご就任いただいた梅田博之先生を中心に、大学の将来構想委員会において種々ご検討いただいております。

昭和十年(一九三五年)、本学の前身である「道徳科学専攻塾」は英国のパブリック・スクールを模範として開設されました。麗澤教育で育てる人物像を「慈悲で至誠で温和で親切で公平で剛健で沈勇で、かつノーブルと申して上品な人物」と記した創立者は、自ら進める教育に対する自信と誇りを次のように語っています。

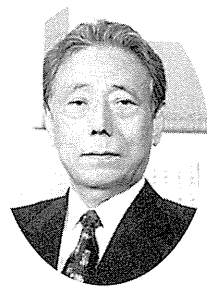
「英国におけるオクスフォード出身者をオクソニアンと呼び、ケンブリッジ出身者をキャンタブと呼び、同国においてともに高き信用を有す。しこうしていま当専攻塾の幹部職員においては当塾の出身者たるモラローグもしくはモラロジアンもまた将来内外各国において最高の名誉と信用とを享受するに至るよう努力するはすでありませぬ」

この願いに応えて、麗澤教育を受けた多くの卒業生が世界中に羽ばたき活躍しております。創立者の理想の実現には、さらなる本学の充実と発展が必要であり、内外から優れた研究実績があり、教育熱心な先生方を招聘して、世界が求める人材の育成と研究に取り組んでいます。今こそ「知徳一体」の創立者の精神を生かし、麗澤教育の真価を発揮して世界に比類なき大学へと発展させていかなければならない、と決意しているところです。

## 麗澤教育をどう考えるか

### ―『麗澤教育』の十年を振り返って―

外国語学部教授 水野 治太郎



#### 一、十年をふり返って

本誌『麗澤教育』が第十号を迎えることになった。早いものである。この十年間に本誌の編集に当たってこられた先生方・職員各位に感謝の意を表したいと思う。

実は、国際経済学部設置以前にも、本誌の前身ともいえるものがあった。『道徳科学年報』である。

当時の「道徳科学」の授業担当者が任意で懇談会をつくり、その委員会が年一回授業報告として発行していたものである。担当者だけの会報であるために、毎回同じ執筆者となり、書き手も、読み

手も少ないために、廃刊に追い込まれた。そんな状況を打開しなかった。新学部設置は絶好の機会となった。当時の副学長に提言したところ、全学委員会へと昇格され、本誌発行が決まった。しかし当初は相変わらず自分が編集責任者となつてしまったのは計算違いであった。

新しい編集方針としては、つぎのような内容を考えた。

1、麗澤教育の方向付けになるものを問題提起すること。

2、教職員の多彩な意見を率直にぶつけ合う意見交換の場になること。

3、学生の意見・活動等も掲載し、教職員・学生

全体が教育の方向を模索し、教育理念の具現化に少しでも貢献できること。

この十年間に編集責任者は、水野から鈴木康之助教授・中野千秋教授へとバトンタッチされてきた。最近では全学的にも関心をもたれるようになり、大学の動きを知る格好の情報誌の役割も担えるようになったことは旧編集者としてはうれしい限りである。しかし、麗澤教育の方向付けになっていくかどうか、教員の率直な意見がぶつかりあっているかどうか、になると十分とはいえない。残念ながら記事の内容が、挨拶程度で終わっていたり、報告にすぎなかったり、今後どうするかという率直な提案の場には、まだほど遠いように感じるのは私一人ではないと思う。本誌を通じて率直な対話の場にするということが無謀な試みであったのであろうか。

## 二、理念は絶えず新たな解釈を必要とする

『道徳科学年報』第一号の「刊行のことば」に、

かつてこう書いた。

「教育は理念が明確でかつそれを支える制度があれば問題はないかという点、決してそういうことではない。理念に依存するだけでなら具体的な努力を怠り、理念を教条主義的に振り回していたのでは、やがてその理念は植物標本みたいに枯渇してしまいうに違いない。大学内外の関心ある人々の協力を得て、現代の社会状況のなかで理念をどう解釈して、社会状況のなかで適応させてゆくかが大学人としての必須の課題である」

この内容はそのまま、いまでもいえることだと思ふので、もう少しその意味を明らかにしたい。

本学の教育の理念は「知徳一体」あるいは「麗澤の心」とか「真の国際人」とかいわれるが、どれをとっても抽象的である。「真の国際人」を除いては、かつての儒教的雰囲気もあつてか、そのままでは風味が伝わってこない。意味を追求するには、背後にある道徳科学の全体像との正面対決が求められ、厄介な問題に直面することになる。そのせいもあつて

か、責任をもって十分な解説を加えた人は少ない。表面的な解説なら誰もがわかっているのであるが、現代の激動する社会にあつて、その適切な意味を紡ぎだす作業はできていない。だから、ともすればタブー視されかねない。

そこで本誌が建学の理念をめぐる突っ込んだ議論をする場づくりをしてもらいたいと願っていたのである。そうした雰囲気づくりを育成する意味で、少し自分なりの考えを自由に述べることをお許し願いたい。それは「知徳一体」という理念についてである。知と徳は、世間ではふつう次元の異なるものとみているか、あるいは対立的に受けとられがちである。知を検討しているときに、いきなり望ましい生き方を配慮することはない。知を行動に移すときになつて、それが人間として善なのか悪なのかを判断することになるのではないか。

たとえば「精神なき専門家」という表現がある。高度専門知識社会への鋭い警告として、かつては機能していた。しかし逆に「専門なき精神家」と表現

されると、これは高度専門知識を欠いていて、社会現実感覚がまるきりない、無意味な教養・精神主義を批判する用語である。人柄だけがよくても社会的不適応を起こしているようでは・・・と、そんな批判意識をずばりと表現している。そういう高度文明社会にわれわれは生きていることを明白に物語っている。「精神なき専門家」も「専門なき精神家」も現代の理想とはいえない。知と徳の双方を同時進行的に議論するのが今日の課題だといえる。

とすれば、知徳一体の理念は、知識と道徳性が一体となつて調和を保っているような静的な社会状態を前提として理解するだけでは不十分である。これからは知識自体の正当性を問う立場から、知の批判原理としての性格を帯びた道徳原理があるのかないのか、あるとすればどのようなものかを追求する、いわば知の本質を問う議論に近づける必要がある。

これまでは、むしろ高度な知識と調和する徳性が必要だとする主張、知の有り様を吟味するよりは、知に見合った徳を追求することだけに比重が置かれ

ているようにみえる。そしてこの側面だけが教育理念として一人歩きしていたのではないか。

だがそれだけだとすれば、現代社会の課題に十分に応える理念といえるかどうか、疑問が沸いてくる。現代に期待されていることは、複雑で高度な現代の科学知・経験知の意味するものを捉え直し、あるべき方向を示すような包括的な原理、知と徳、科学と道徳が本来的に統合される地平の探求ということが求められているのではないかと考える。

### 三、提案—新たな課題に向かつて

そこで言えることは、第一には、「知徳一体」の教育理念を、「そうあるべき」と考える理想主義的議論から解放し、まず知と徳の対決をすすめるダイナミズムを生み出す手法をつくりだす必要がある。元来、この「知徳一体」の原理の提案者は、かつて知と徳が鋭く対立している状況の狭間のなかで苦悩した結果、思考の原理としてこれを提案していると私は理解している。とすれば、知の批判原理として、

あるいは徳の批判原理として、この理念は二重の役割を遂行することが本来的に求められてきたと思うのである。

第二には、知徳の一体化を思考するこれまでの手法は、道徳論を科学的思考に近づけることに力がはいつていた。いや科学的思考の力を借用することで、道徳論の科学化を推進してきた。しかし今後は、高度文明社会のなかでつきつぎに生み出される科学(技術)を道徳化する議論に比重をおくべきであると提案したい。それは医療技術を筆頭にあらゆる科学技術の人間化を推し進める運動の先頭にたつことを意味するものである。高度文明のよき理解者であると共に、よき批判者をめざすこと、それがこの理念には求められている。

第三に、知との対決を可能にする道徳論はどうあるべきかを真剣に検討する必要がある。それは知的分析能力を高めると共に、それだけに終わらないで、鋭い道徳的感性を磨き上げる手法、さらには道徳的推論を展開するための手法を探索すべきだと考え

る。

そうした手法は、知に見合った徳を議論するのではなく、知のあるべき意味と知それ自体を徳の視点から問題提起すること、さらに知の側面から徳の内容を批判吟味する作業の双方を同時的に行うこともある。

以上、知徳一体の理念の新たな意味を提案させていただいた。最後にこのような考え方に立ち至った過程をかいつまんで述べることにしたい。

#### 四、背景

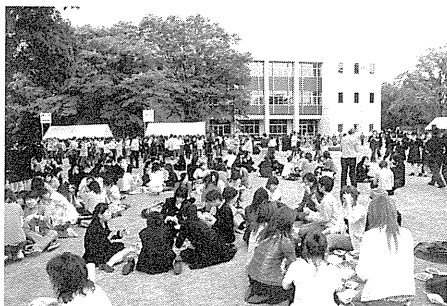
いま私は、言語教育研究科・比較文明文化専攻「比較福祉研究」という科目を担当しているが、授業内容は各国福祉制度の比較研究ということよりも、福祉の根底に見据えられる人間像を直接に体感しながら制度の根幹に踏み込んでゆく「臨床人間学」という学問の樹立に向かって挑戦中である。哲学的人間学よりはさらに現実的で豊かな内容を備えるものだと考えている。拙著『ケアの人間学』はこの道

の先駆的研究として理解してくださると幸いである。

こうした現実的で豊かな内実を備えた学問を推し進める立場からすると、本学の「道徳科学」をより現実感覚のある優れた学問に仕立て直してみたいとする欲求が沸きあがってきたのも、私にとってはごく自然のことである。大学人として建学の理念を教室のなかで教えるということは、簡潔にいえば、理想主義と現実主義の相克のなかに身をおくことである。数十年間にもわたってそうした仕事に従事できたことを幸いだったとする思いと、このなかで培った問題意識を次世代に受け継いでもらいたいとする強い願望が起こってきた。これまでに述べた理念改革の構想は、こうした思いに支えられたものであることを記しておきたい。



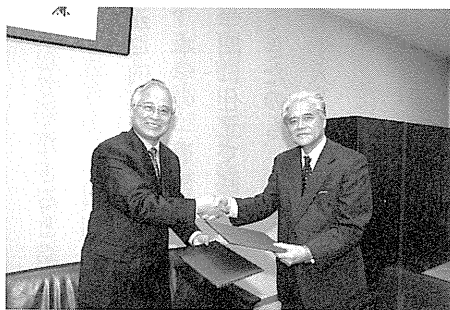
大学の玄関に飾られた廣池千九郎の胸像。制作者の赤堀光信氏（2003.9.12）



今年もにぎやかに繰り広げられた野外昼食会（2003.5.7）



野外昼食会に特別参加した横綱朝青龍が、大学を視察（2003.5.7）



上海财经大学との提携更新の調印後、握手を交わす談敏学長（左）と梅田学長（2003.10.21）



大学院生や学部生に講演する犬養道子先生（2003.6.12）



## 〈特集〉 いまどき道徳? いまこそ道徳!

今回の『麗澤教育』は創刊第十号。本誌は年一回の発行ですから、創刊からちょうど十年という節目を迎えたことになりました。この記念すべき第十号の特集を企画するにあたり、「いま一度、原点に立ち返ろう」ということになりました。

本誌『麗澤教育』の「原点」とは何か。もちろん、広い意味においては、「知徳一体」を旨とする本学の建学の精神にあるといえます。また、本誌の内表紙には、『麗澤教育』発刊の趣旨が毎回掲載されています。

しかし、その背後に、本誌の前身といふべきものがあつたことを知る人は、それほど多くはありません。それは『道徳科学年報』というもので、「道徳科学」の授業担当者による授業報告書として、年に一回発行されていたのです。これこそが、まさに本誌『麗澤教育』の生みの親といふべきものです（本誌創刊までの経緯については、本号十五頁からの水野治太郎教授の記事をご参照ください）。

平成四年の国際経済学部開設以後、本学における倫理・道徳教育は、さらに多様な展開が図られてきました。教養教育としての「道徳科学」に加えて、「ビジネス・エシックス」をはじめとする授業が各専門分野

の教育にも配置されるようになりました。こうして、教養教育・専門教育を貫く倫理・道徳教育が目指されるところにも、もう一方では、各種ボランティア活動や寮生活における倫理・道徳の実践を奨励するキャンパス環境づくりにも力が注がれてきました。

そこで本号では、「教養教育」「専門教育」「実践活動」という三つの側面から、本学における倫理・道徳教育の現状を紹介することにしました。本学の「建学の精神」をあまりよくご存知ない方や、新入生の皆さんの中には、「いまどき何故、大学に入ってまで道徳なのか?」と訝る方も少なからずおられることと思います。また一方では、政界のスキャンダル、企業不祥事や医療事故の頻発、環境問題や教育現場の諸問題など、昨今の世相の乱れに対して、倫理の欠如・道徳の退廃を憂う声も高まりつつあります。

今回の特集「いまどき道徳? いまこそ道徳!」が、いま一度原点に立ち返って、今日の社会における麗澤教育の意義やあり方を省みる手がかりとなることを願っています。

(編集委員長 中野千秋)

# 麗澤大学における道德科学教育の現状と課題 — 教養教育と専門教育を貫く

## 倫理道德教育を求めて—

国際経済学部教授  
道德科学教育委員会委員長

北川 治 男



### 一. 建学の理念と現代社会の要請

麗澤大学は建学以来、「知徳一体」の教育理念のもとに「高い品性・人格・徳性と高度な専門性を備え、現代社会の諸問題の解決に主体的に取り組むとともに、国際社会に貢献できる人材の育成」に努めてきました。

大学で培った高度で専門的な知識や技術は高い道德性に裏付けられたものでなければ、真に社会を益することはできません。また昨今の社会における倫理道德の紊乱<sup>びんらん</sup>を見れば、個人の道德性の確立と同時に、企業倫理や情報倫理をはじめとする専門倫理の確立が喫緊

の課題です。さらにグローバル化の著しい進展にもかかわらず、民族や宗教の対立や抗争が後を絶たない国際社会においては、多元的な価値の存在を容認しながら人類に共通・普遍の倫理道德を探求することが不可欠の課題です。

### 二. 教養教育および専門教育における倫理道德教育

本学では、外国語学部においても国際経済学部においても、教養教育のコア科目として「道德科学」の授業を必修科目に位置づけ、現代社会における人間の生き方と倫理道德のあり方を探求し、それに基づく倫理道德教育に取り組んでいます。「道德科学（モラロジー

一)は、創立者・廣池千九郎(一八六六—一九三八)が『新科学モラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』(一九二八、英語版 *Towards Supreme Morality—An Attempt to Establish the New Science of Moralogy*, 2002)において提唱した学際的な倫理道徳学であり、終生、品性・人格の向上をめざす生涯学習論でもあります。

「道徳科学(モラロジー)」がめざすものは、倫理道徳を学問研究の俎上(そじょう)にのせることであり、現代社会における人間の生き方や科学技術文明の意味と役割を倫理道徳の視点から問い直すことであるといえます。この「道徳科学(モラロジー)」は、今日の麗澤大学においては、二つの方向に継承されています。第一は、教養教育としての倫理道徳教育を教育課程の中に位置づけ、「道徳科学」の授業を通して学生諸君の人間の成長を支援する方向であり、第二は、すべての専門教育を貫いて倫理道徳教育を重視する方向です。

まず第二の専門教育における倫理道徳教育について触れておきましょう。たとえば国際経済学部において

は、企業倫理や情報倫理の研究と教育を重視し、生命・医学倫理、科学・技術倫理、環境倫理、政治倫理など学際科目関連のカリキュラムの整備に力を注いでいます。また「企業倫理研究センター」においては、行政の審議会や民間の企業、研究機関などと連携し、企業経営をめぐる倫理問題の解決に指導的な役割を果たしています。

また外国語学部においては多文化理解教育を推進していますが、その基礎として倫理道徳教育を重視し、国際交流に寄与する人材の育成に努めています。なお「比較文明文化研究センター」においては、それぞれの文明・文化の特性を探索するとともに、相互理解の基盤となる人類共有の倫理道徳の研究にも力を注ぎ、多文化理解教育を支援しています。

今後さらに、上記の専門倫理教育および多文化理解教育と、教養教育としての倫理道徳教育の連携を深め、本学における教養・専門を貫く倫理道徳教育の可能性を探り、その充実・発展を図るためには、全学的なレベルの開かれた論議が必要になってくると思います。

### 三、授業「道徳科学」の現状と課題

今日、わが国の大学においては、それぞれの教育理念に基づく教養教育カリキュラムの構築が要請されています。これからの時代の教養は、地球的規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力であり、こうした教養を獲得する過程で身につく品性・人格・徳性であるといつてよいでしょう。このような要請に応える意味でも、本学では建学以来、教養教育カリキュラムの中心に「道徳科学」の授業を位置づけ、実績を積み重ねてきました。

#### (1) 「道徳科学」の目標

「道徳科学」の授業では、「知徳一体」という建学の理念を、次のような下位目標に具体化し、授業を展開しています。

- ① 現代の社会問題を倫理道徳の視点から分析し解決に取り組むスキル（情報収集能力、資料整理能力、分析能力、責任能力）を身につける。

- ② 過去の歴史や聖賢の教えに学びながら、価値観抜きには生きられない人間の本质について考える。

- ③ 全学部生・留学生を対象とする授業として、対面的・互恵的な人間関係と信頼を築き、価値多元社会を生きる知恵と寛容さを学ぶ。

- ④ 現代人特有の心の痛みや苦悩に向き合えるようにするため、心の癒しや死への準備教育の課題にも取り組む。

- ⑤ 教養教育としての倫理道徳教育には生涯学習の視点、生涯をかけて人間性・道徳性を培うことが重要であることを認識する。

#### (2) 「道徳科学」の授業

現在、「道徳科学」は、共通科目（外国語学部）あるいは基礎・学際科目（国際経済学部）のひとつとして位置づけられており、一年次の必修科目として、一学期に「道徳科学A」二単位、二学期に「道徳科学B」二単位、合計四単位を履修することになっています。クラスは学部別に編成されており、外国語学部六クラス（約六十名ずつ）、国際経済学部九クラス（約四十

名ずつ)、全体で十五クラスあり、担当教員十名で授業を行っています。

各教員は上記の目標を共有しながら、それぞれの専門分野を活かしたユニークな切り口で授業を展開しています。たとえばテキストやプリントを用いての講義に加え、視聴覚教材やワークシートを用いて学生の内からの気づきを促したり、現代社会の倫理道德問題を取り上げて討論やディベートをするグループワークを取り入れるなど、多様な授業を展開しています。各教員の授業内容や方法の向上をめざして「道徳科学教育会議」をほぼ毎月開催し、FD（教員の資質向上）のため相互に授業の情報交換を行っています。

二〇〇〇年度より、導入授業用パンフレット「麗澤大学建学の精神・道徳科学」を毎年作成して、新入生全員に「道徳科学」の最初の授業時に配布し、授業のねらいと意義について理解させ円滑な導入ができるように工夫しています。このパンフレットは両学部部の全教員にも配布し、「道徳科学」の授業についての理解を共有するとともに、意見聴取のツールとしても活



テレビ会議システムを使った授業の一コマ

用しています。また保護者会の参加者にも配布し、教養教育としての倫理道德教育の場としての「道德科学」の授業に理解を深めてもらうことをねらっています。

### (3) 「道德科学」の成果と課題

学生諸君は「道德科学」の授業にさまざまな感想や意見をもっていますが、まず学生が受けた学習上の利益については、次のようなことが挙げられます。

①自己の生き方について考える機会を得、目的や目標をもって人生を生き抜いていくことが重要であることに気づき、大学で学ぶことの意義を見出すようになる。

②環境問題、臓器移植、企業経営、国際紛争、多文化理解などに倫理道德上の問題が深く関わっていることに気づき、専門教育へ進む際の問題意識を育む機会となる。

③価値相対主義や価値多元社会のインパクトのもと、倫理道德にも大きな揺らぎが見られる今日ではあるが、各人の人格の中核をなす共通の徳性、および各種コミュニティの中核をなし人類が共有

できるコモン・モラリティの探求は可能であり不可欠であることに気づく。同時に異なった価値観を持つ民族や宗教に対しては、寛容と「互敬の精神」で対応することが重要であることを理解する。また「道德科学」の授業が抱えている問題点や課題については、次のような点を指摘しておきたいと思います。

①上記の学習上の利益を感じ取り、「道德科学」に積極的な関心を持つ学生も多いが、単位取得の必要から授業につき合っている学生や、倫理道德の問題に関心が無かったりうさんくさく感じている学生にも、魅力ある授業を展開することは容易ではない。参加型の授業形態や多様な教材の開発が不可欠である。

②現在の大学一年次生に、講義中心の授業形態だけで倫理道德に関する判断力や責任能力を培うには無理があり、体験学習やフィールドワークを取り入れる必要があるが、カリキュラム上の制約もあり、思い切った工夫が必要である。

③今日の複雑な倫理道徳問題は、「道徳科学」担当者の専門分野を越える課題が多いので、授業情報との交換だけでなく、担当者以外の教員との共同研究を行う必要がある。

④倫理道徳教育については、教育効果の測定が容易ではなく、「道徳科学」の授業のねらいや目標の明確化とそれに連動した評価基準の明確化も重要な課題である。

#### 四 キャンパス全体における倫理道徳教育

本学では、これまで述べたような倫理道徳教育を日常の学生生活で応用的・実践的に体験する場として「国際寮」や「国際交流センター」を設けて、多数の留学生を受け入れ、学生の自治的活動や異文化交流を支援する体制を整えています。海外留学や海外派遣などの機会の充実も、学生にとって日本人としてのアイデンティティを確認する場となり、人類社会の多元的な価値観を受け入れながら国際社会に貢献できる人材の育成にとって重要な役割を担っています。

さらに学生の専門能力を活かした社会奉仕活動として、特定非営利活動法人「柏インターネットユニオン」と連携して地域の小中高校の情報基盤整備を進めるなど、国内・国外での奉仕活動も地道に展開されています。

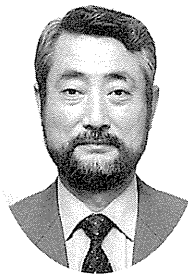
なお二〇〇二年には「麗澤大学教員倫理綱領」を策定し、「国際性豊かな人間味溢れるアカデミックな共同体 (International, Human and Academic Community)」づくりをめざし、構成員の人格と人権が尊重される公正で思いやりのある教育環境の保持に努めています。

本学にも解決すべき課題は沢山ありますが、教養教育および専門教育における倫理道徳教育の充実と、それに対する全学的な支援体制の整備を通して、本学共同体に集うすべての成員にとって望ましいキャンパスを作り上げるとともに、本学の社会的使命を果たしていきたいと念願しています。

## 「道徳科学」授業の一端

― 課題「親に感謝の心を表す」について ―

外国語学部教授 岩 佐 信 道



### 一、授業の全体像

私の「道徳科学」の授業のねらいは、広く人間の生き方を、本学の創立者廣池千九郎が確立したモラロジの所説を手がかりに考えることにある。具体的には、前期は数週間の導入的な授業の後、「人間の自己中心性を見つめる」を主なテーマとして、家族の崩壊、地球環境、いじめなど人間関係の葛藤の問題を扱っている。後期には「相互依存と相互扶助のネットワークの中で生きる」を主なテーマとして、「万物を育む心」「支え合いの中で自分の役割を果たす」「いのちと生活を育む存在」「心のネットワークを広げる」などの内

容をとりあげる。また学生には、「自他を生かす道―互敬の世紀を拓く」(モラロジ―研究所発行)を課題図書として、各章ごとにその骨子と感想をまとめる小レポートの提出を求めている。

ただ、ここでは授業の全体的な紹介よりも、平成十五年の日本教育心理学会で「大学生が親に感謝の気持ちを伝える意義」というテーマで発表した一つのトピックを取り上げてみよう。

### 二、「伝統の日」と関連する課題

六月最初の週末、麗澤のキャンパスでは本学記念日との関連で「伝統の日・感謝の集い」という大きな行



事が行われる。ここで「伝統」とは、我々人間のいのちと生活を支え育んでいる大切な存在のことで、「道徳科学」の授業担当者はこの行事の意義についてふれることを申し合わせている。「伝統」そのものについては、後期にある程度詳しくとりあげるが、五月末には、私たちの生活が多くの存在に支えられていることとそうした存在に対する感謝の意義にふれている。そしてその締めくくりとして、私は「親もしくは親に代わって自分を育ててくれた人に感謝の心を具体的な形で表し、その反応や自分の感想をレポートする」という課題に取り組んでもらっている。また、伝統について詳しく扱う後期にも同様のことを扱う。

このような課題は、ある意味で押しつけがましいともいえる。また単純に親に感謝の気持ちを表すことのできない学生もいるであろう。後期には、そうした学生の考え方の変化の事例などもとりあげている。しかし、ほとんどの学生がこの課題に真剣に取り組むのは、私たちがいかに多くの存在に支えられているかについて、導入授業である程度の理解が得られていたからで

はなかるうか。男子学生の多くは、自分の小遣いでプレゼントを贈る、家の仕事を手伝う、食事の用意などで感謝の気持ちを表している。女子学生では、普段母親がしている家事を代わってやるというケースが最も多く、親元から離れている学生の場合、感謝の気持ちを手紙や電話で伝えている。この課題をきっかけに久しぶりに国の親に電話をした留学生もいた。

学生たちは、自分が普段親に苦労をかけていること、親のお陰で順調な大学生活を送ることができていることなど、親への感謝の気持ちがないわけではないが、それを改めて親に伝えることは照れくさいようである。ところが、この課題をきっかけに感謝の気持ちを具体的な形に表した学生たちは「親が自分のささやかな感謝の気持ちをこんなに喜んでくれるとは思わなかった」「親の方から『ありがとう』といってくれた。感謝しなければならぬのは自分なのに」「親が毎日やっていることが大変なことだとわかった」「久しぶりに電話で感謝の言葉を伝えると、かえって遠く離れた親からそれ以上の自分を思う深い親心が伝わってきた

て、涙があふれた」などというように、感謝の気持ちをしつかりと伝えることの大切さとそのインパクトを実感するようである。そして「このような機会をもててよかった」、「伝統の日に感謝します」というような感想を書いている。

### 三、若者の自立と成長

概して、学生たちはこのような課題を通じて親との心の通い合いと絆の深まりを実感している。そこから、親が果たしてくれた役割を今度は自分が引き受ける立場になる事を自覚し、自分も人間としてしっかりと勉強しなければ、というような決意にいたる場合も見られる。さらに親ばかりでなく他の存在に対しても感謝の心をもつことの必要にも気づく学生がいる。

このようなレポートを読むにつけ、私は、親や家族との心の触れあいを深めることのできた学生や、入学以前から親密な親子の関係を保ってきた学生たちは、きつとしっかりとした学生生活を送ってくれるであろうし、おそらく親が悲しむようなことはしないだろう

との感を強くしている。

考えてみれば、大学生のみならず、どの年代の人間にとつても、自分とさまざまな存在との「つながり」を見つめ、それを豊かなものにしようとする努力することは、人間としての生き方の基本であり、しかも感謝の心は、その「つながり」において極めて重要な意味を持つといえる。ちなみに、思いやりの観点からの道徳論を展開したC・ギリガンは、その講義の中で「人間はその青年期の発達の過程で親に依存した(dependent)状態から自立的(independent)になるうともがくが、結果的には単なる関係の断絶(separation)に終わってしまうことが少なくない」と警告していた。またE・デシは、人間の学習は、ほうびや罰などの外的要因に動かされてではなく、学ぶことの楽しさや喜びから自発的に行われることが重要で、そのためには自己決定、有能感とともに確固たる「つながり」の経験が欠かせないとしている。そして、親に支えられていることの自覚は、若者の健全な自立に不可欠であると明言している。

大人になりつつある大学生にとって、「親からの自立」とは単に親との接触や結びつきが薄く、少なくなることではない。むしろ、親との関わりがいかに大きく深いかということをもに見つめることこそ真の精神的な自立の基礎といえるであろう。この道徳科学の授業が学生諸君のそのような精神的な自立と成長にやささかでも役立つことを願うものである。

### 学生によるレポート「親に感謝の心を表す」

次の文章は、それぞれ一年生の時、「親に感謝の心を表す」という課題に取り組んだ三人の学生から提出されたレポートである。それぞれ、本人の了解をえてここに収録されている。

### 親に感謝の心を伝える



国際経済学科二年 黒川征一郎

今日、親に感謝の心を伝えるところまでなかなか決まらなかったが、

私は今日が休みなので、一日中親のそばにいて親が無理をしようとしたらそれを手伝おうと決めた。父親はこの日、朝から仕事で帰ってくるのはとても遅いことから、そばについて何かをするというのが無理なので、父親には申し訳ないが母親だけに感謝を表すこととなつてしまった。

私は普段から親を大事に見て、いつも手伝っているわけではないので、初めは親がいつも何に困っていて、何をしようとしているのが分からないから、じっと親を見ていた。親が困っていたら自発的に手伝おうと思っていたら、親の方から「手伝ってくれ！」と言われたので少し悔しかった。もちろん、私にできて親にできない事といえば荷物運びのような力仕事しかない。私が運んだ荷物の量はかなり多く、私がいなかったらこんなのを一人で運ぼうとしていたのかと思うと、「普段から自分の知らないところで迷惑をかけていたんだなあ」という事が窮えた。その時、一緒に荷物を運んでいた親の姿を見て、普段何気なく見ていた親が急に小さく見えた。親というのは自分より大きく、いつ

も助けてくれるような存在の人だったが、いつの間にか私は親を超し、今度は親を助ける存在になっていくことに驚き、それに対するプレッシャーが生まれた。

今日、親に感謝の心を伝えるつもりであったが、感謝を伝える中で私に一つの義務が与えられている事を知った。それは、今までは私の親がこの家族を支えてきたが、この数年間で支える人間が親から私へと交代しなければいけない事である。両親はどう思っているか分からないが、私はそうしなければいけない気がする。感謝というのは伝えられなかったかもしれないが、大切な事を学べて良かった。

### 常に心を込めて親に感謝の気持ちを表す（二学期）

日本語学科二年張 群



私は、七〇年代に生まれましたので、その時、中国はまだ貧しかったです。親は私と弟のために、懸命に働きました。特に、私は小

さいときは、病気がちでしたので、親はそれでとても

苦労しました。小学校の一年から三年までは、家からとても離れた学校に通ったので、父は、毎日自転車私を送り迎えしてくれました。その時、私は父がそういうことをしてくれたのは当たり前のことだと思っていました。親に対して、一回も「ありがとう」と言うことはありませんでした。

私は今でも、前期に先生が同じ宿題を出した時のことを覚えています。ちょうど父は体調が悪くて、病院で検査をして、私はその結果を待っていたところでした。先生の宿題がきっかけで、私は、電話で親に自分の今までの感謝の気持ちを伝えました。病気の父は、娘からの心を込めた言葉を聞いて、すごくうれしかったようです。

今は、私は日本にいますので、親の面倒を見ることもできませんし、逆に親に心配をかけるばかりです。最初日本に留学に行きたいという話を言い出した時、両親とも猛反対しました。私は、自分の気持ちをすべて話しました。そうしたら、親は私を応援してくれました。でも、やっぱり一人での海外生活だから、親は心配に

違いありません。私としては、親がくれたこの命を大切にしておいて親に安心してもらうしかありません。今回の宿題がきっかけで、私はもう一回親に電話で感謝の気持ちを表しました。そして「あなたたちの娘として、私はとても誇りに思っているから、自分の体を大切にしておいて頑張りていきます・・・」と言いました。両親は大喜びで、母の泣き声さえも聞こえました。両親は先生、私の道徳についての認識は、まだ不十分ですが、私の心の中では、ずっと親のことを大切にしていきたい。これからもこの勉強を通じて、親の生きていくうちにいろいろな親孝行をしていきたいと思えます。本当にありがとうございます。

### 「親に感謝の心を表す」



ドイツ語学科三年 梶本 佳世子

六月三日、私は一日主婦をし、親への感謝の手紙を書きました。

この日はたまたま母が一日外出をする、ということもあり、私は朝から炊事、洗濯、そ

して家の掃除をしました。夜には一日主婦の感想も含んだ感謝の手紙を書き、居間のテーブルの上に置いておきました。

母は夜に、そしてもうすでに床に就いてしまった父は、翌朝それを読みました。次の日の朝、私が起きて、部屋でボーっとしていると、突然父が「かよ、かよ！」と私の名を叫んでいる声がしました。私は「はい」と返事をしましたが、その後父からの応答は全くありませんでした。

しばらくして一階に下りてみると、父はテーブルの上に置いてあった「父、母へ」という封筒を見て、もしかしてこれは遺書ではないのか、とびっくりして私の名を呼んだ、とのことでした。

おそらく、普段私は真面目に親に手紙を書くことなんてないので、父は大変驚いたのでしょう。また、私の返事「はい」を聞くと、娘・佳世子はチャンと家にいる、と確信を持ち、黙って私の手紙を読み始めたのでしよう。母は、私に「いい大学へ入ったわね。お母さん、うれしいわ」と言って、とても喜んでくれました。

## いのちをみつめて

### —道德科学の授業から

外国語学部教授 欠端 實



私の授業では、「いのちをみつめる」をテーマにかけ、毎回、いろいろなビデオを見て、意見や感想を書いてもらうこととしています。日本もいよいよ二〇〇二年に「新・生物多様性国家戦略」を策定しました。多様なものとの共生、文化的多様性が求められる二十一世紀ですが、学生たちには、まず映像を見て感覚的、身体的に感じ取ってもらうことによって、今後のモラルを理論的にも深く考え抜いていく契機にしてもらいたいと願っています。

現在の日本にはあらゆる面で個人主義的傾向が顕著となってきました。元来、個人とはキリスト教思想に基づく特殊な概念であり、神の理性を分有する「分割

できない絶対的存在」が個人であったとされています（西垣通）。個人という概念は宗教と深くかかわっていたのですが、明治以降の日本人は、そのことを受け止めたようとはしなかったようです。その結果、今日のわが国においては、バラバラ主義の蔓延ともいえるべき状況にあると思われまます。個人の背後に宗教的バックボーンもなく、家族や地域社会、国際社会でのつながりも、はなはだ希薄になってきています。

日本にも全霊（神）にたいして分霊を有する個人という考え方がありましたが、日本人の宗教離れが進んで、今日ではほとんど省みられなくなってしまいました。「そもそも、まだ宗教がなかった五千年前、一万

年前の地球上で人々は何を支えに生きたのだろうか。天地万物に生命があり、魂があるという普遍的な宗教意識を抱いていたのではなかったか」（山折哲雄）。

日本人が古来から培ってきた思想によれば、我々のいのちは、宇宙の中に生み出されたものであって、親をはじめとする家族に生まれ、社会の中で多くの人に支えられながら、いのちの限りをつくして生きていくべきものと考えられてきました。その意味では、自らに与えられたいのちは自分だけのものと考えずに、一部は宇宙のものであり、親祖先のものであり、社会のものでもある（廣池千九郎）とする考えを心中に抱きもつことが、日本人にとっては普通のことだったと思われまふ。このようないのちの伝統的な捉え方も、一つには明治以降の宗教政策のため、二つには、こうした考え方の基盤となっていた農村部の解体ないし激変によって、きわめて力弱いものとなってしまいました。

そこで授業では、日本人のモラルを支えてきたと考えられる意識を再確認して、それを評価してみたいと思っています。具体的には、われわれのいのちは、宇

宙に満ちている「大いなるハタラク」に支えられたものであること、そして生きとし生けるものは全て「つながりのある存在」であることを、確認し納得してもらうことを目標にしています。

以下に、授業の中の二回分ですが、学生たちの反応を紹介したいと思います。最初は、柳澤桂子の闘病生活をつづったビデオを見ての感想です。

「社会のルールだけでなく、自然界のルールにも気を配っていかなければ、人類は地球上で共生できない」「いのちは自分一人だけのものではない―ビデオで一番印象に残った言葉です」「わたしの命が三十六億年の歴史があるといわれると、とてもずしりときます。でもちゃんと考えてみると本当に地球上に生命が生まれた時から、途絶えることなく代々受け継いできているわけで、なんかこれだけでも感動。何世代にもわたって生きているのちに溢れている地球。その地球に生きるすべての生き物が、お互いに、与え与えられ、支え支えられて生きています。いのちは単独のものではなく、からみあって生きているんだと思いました」



欠端教授の授業を受けている学生たち（廣池千九郎記念講堂前で）

「自分のいのちが自分だけのものではないんだって思えると、ちょっと積極的になれる気がしたし、他人のいのちも自分のいのちも大切にしたいと思えた」

他にもいろいろな感想があります。「わたしの人生は私のもの。だから私のいのちは私のもの。であるから、思い通りに、好きなようにしていいと思う」と述べる学生もいます。

次に生物学者、野沢重雄のトマト栽培のビデオを見ての感想です。

「現在、地球のさまざまな環境問題が取り上げられています。人間は自然をただの酸素供給源としてとらえすぎているような気がします。人間はもっと自然や植物にも心があることを意識し、それらと接するべきではないかと思いました」「自然のメカニズムが全知全能の神ならば、やはり畏れ敬うべきものであろうと思う。私は神を信じてはいないけれども、人間に深くかわり、人間を育ててきたのは自然だと思う。今現在でも私たちが生かされているということは奇跡だと思う」「生きているものすべてに心があるなら、こ



の新しい二十一世紀は自然のこともっと深く考えていかなければならないと思った。私たちが日本を支えていく日は近い。その日までに自然について考える時間を増やしていこうと思う」

授業を通して学生との対話が続いています。

## 自然も大切な一つの命



ドイツ語学科一年 相原のり愛

欠端先生の道徳科学の授業では、毎回、一つのテーマについて書かれたプリントが配られます。そして、それに関したビデオを鑑賞し、その中で思ったことや印象に残ったことを書いて提出します。

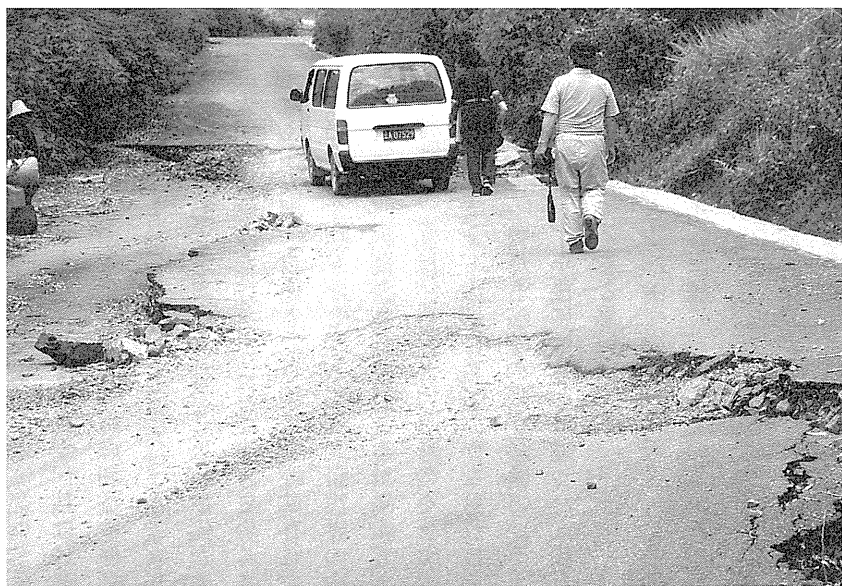
各学期のテーマの中で特に印象深かった授業を取り上げると、まず、人間と自然との関わりのテーマでは、環境問題についてです。現在、世界には森林の大量伐

採や地球温暖化、環境ホルモンなど多くの問題があり、さまざまな異常気象も起こっています。私は、これら全ての問題というのは、人間が自らの利益や便利さを追求し、生活をより快適にすることだけを求めるなど、自分たちのことしか考えなかったことが原因だと思えます。人間は自然がなければ決して生きていくことはできません。人間⇨自然という関係で、共存しなければいけないのです。しかし、人間は、自然界の一部であることを忘れ、人間が地球をコントロールしているという状況です。私は、自然というものを一つの命としてもっと深く考え、大切にしていかなければいけないと思います。一人でも多くの人が考えていくようになれば、五年後、十年後には今とは違った人間と自然との関係が見えてくると思います。

次に、人の生き方をテーマとした授業で深く考えさせられたのは、地域医療に携わっている医師のガン告知の話でした。ある女性がガン告知を受けても、最後まで生きることを諦めなかったというものでした。彼女が「生」にこだわりの、生き抜いたのは、家族の支え

があつたことは言うまでもありません。何より彼女に、まだ生きたいという気持ちが強くあつたことがうかがわれます。実際に彼女は、宣告された寿命よりも一年も長く生きることができたのです。私は、どんなことがあつても生きることを諦めず、常に希望を持ち続けられ、できないことはないと感じました。「死」は、誰にも訪れるもので、それは人により長短はあるけれども、死ぬまでの人生を自分がどのように生きたか、自分にとって満足のいく人生であつたかが重要だと思えます。そして、満足のいく人生を送るには「がんばらない」ということが必要だと知りました。これは、怠けることではなく、力を抜いて、しかし、決して諦めず、最後まで希望を捨てないことを意味します。私は、これを聞いた時、頑張るといふことは、今、頑張っていることを否定することになると知りました。力を抜いて心に余裕ができれば、いろいろな生き方が見えてきて、道が開けてくると思うのです。

私は、欠端先生の授業で、改めて「考える」機会を得ることができたと思います。



異常気象がひんぱんに起きて自然破壊が進む＝中国の雲南省で（1999年8月8日）

## 「道徳科学」教育の難しさ

―授業担当を終えるに当たって―

外国語学部教授 森川 正大



外国語学部の「道徳科学」の授業を担当して四十年になる。私にとって「道徳科学」は、大学で初めて教壇に立った因縁深い科目である。その頃の「道徳科学」

は、「特別講義」という形で、卒業要件を越えた教育課程として位置づけられていた。週一回二時間の授業が一年次から四年次に配当され、廣池千九郎の『道徳科学の論文』（以下『論文』）全冊を教科書としていた。講義は本学の教員にモラロジー研究所の職員を加えた約二十名によるリレー方式で行われていた。私は、昭和三十八年度の一年次生対象に『論文』の第三章、第四章を計六時間担当することになり、張り切って準備したことを思い出す。爾来今日まで、「道徳科学」は

私の最長の担当科目となったものの、他の科目に比べ最も難しく、重荷に感じていたことは否めない。

さて、本学の「道徳科学」教育にも変遷がある。「特別講義」としての「道徳科学」は昭和四十四年度までで、昭和四十五年度には一般教育科目に組み込まれて単位化され、一・二年次は必修、三・四年次は選択となった。講義は集中講義方式で、年三回に分けて、三、四日ずつ行われた。昭和四十六年度からは正規の時間割の中に組み入れられ、週一回、一年次は一クラス四十名前後で、二年次は一クラス十五名前後の少数で行われた。『論文』に親しませると共に人格的感化を与えることを意図した変更であった。また、三・

四年次はコース選択制とし、『論文』を教科書とするクラスのほかに、道徳実践の課題を扱うクラスも設定された。昭和五十四年度の改定では、道徳科学の学問的品格を考慮し、一般教育科目の総合科学分野に移された。さらに、昭和五十七年度、六十年年度にも変更が行われているが、特に全寮制が廃止された昭和六十年年度以降の改定では、学生数の増加と質の変化への対応が課題であった。

近年、学生の多くは、廣池千九郎の名前も建学の理念が道徳科学であることも、そして「道徳科学」が必修であることも知らずに入学してくる。このような学生に「卒業要件」という縛りのもとで「道徳科学」を教授するのであるから、抵抗感を示す者がいてもおかしくない。学生は、語学を学ぶために入学したのであって「道徳科学」は望むところではないと言う。そこで、外国語学部の場合は、履修クラスの選択制を採用し、学生は担当者の示す講義題目、授業内容、評価方法等を手掛かりに六クラスの中から選択することになるものの、同時間帯に配置されている「教養ゼミナ-

ル」の選択と連動するので、選択の余地は多くない。必修という強制感をやや軽減する措置であるが、学生のニーズを満たすものではない。なお、一クラスは五、六十名に抑えられている。

私は講義題目として、二十世紀の間は「二十世紀の課題」や「人類共存の課題」を掲げ、広く大きな視野をもつことと、「いかに生きるか」考えることを提案してきた。この題目に魅かれるのか、履修者数は毎年六十名前後で安定していた。しかし、二十一世紀を迎えたのを機に、題目を「廣池千九郎に学ぶ」に変更したところ履修者数は見事に減少した。平成十二年度の五十八名が、十三年度は五十二名、十四年度は四十七名、十五年度は四十名である。「廣池千九郎に学ぶ」は、古く固いイメージで今時の学生にアピールするものではないが、敢えてこれを掲げた理由は二つある。第一は、毎年行っていた「廣池千九郎記念館」見学が好評で、見学を機に廣池千九郎をさらに知りたいという学生が増えること。第二は、道徳科学の原点に戻りたいという気持ちがあるが年々沸々とし、かつ履修者が少な

くなることを歓迎したい気持ちもあつたからである。

教育は、基本的に教師と学生の相互作用で成立する。学ぶ意欲がある学生を歓迎したいが、教育には強制で成立する面があることも否めない。多くの学生は素直である。百聞は一見に如かず、記念館見学を契機に創立者や麗澤教育の精神に興味を持つ。「道徳科学」が一種の宗教的洗脳教育ではないかとの先入観・警戒感を払拭するのに有効である。記念館見学の感想文は、廣池千九郎を学者として実感することを素直に語ってくれる。

しかし、「道徳科学」の教育は実に難しい。多くの学生には問題意識や内発的動機づけが無い。内容を理解できるだけの基礎知識や社会経験が乏しい。適当なテキストが無い。講義のみでは居眠りが始まる。かと言って、高校までの教育の影響か、受け身の学生が多くグループ討論が成立しない。外国人学生が多い場合はこれも意識する必要がある。私の平成十五年度のクラスでは四十名中、十三名が留学生であった。三分の一にもなる。外国人学生は文化的背景と受けてきた教

育が異なる。日本人学生に比べ年齢が高い。職業経験のある者、既婚者や子供を持つ者等、日本人学生より数段大人である。極端に表現すれば、子供と大人を一緒に教育するような難しさがある。一方が満足しても一方は不満足となる。



森川教授の授業の一コマ

今、多くの課題を未消化のまま「道徳科学」担当を退く感が強いが、私立大学の多くが建学理念の教育を放棄していく中で、本学の「道徳科学」は、紆余曲折を経ながらも、その地位を維持し、実績を積み上げてきたことは間違いでない。これからも、担当者の不断の努力と熱意に

支えられていくことを期待する次第である。

最後に、私の授業を履修してくださった数多くの諸氏に感謝の意を表し、辛多かれと祈りたい。

### 麗澤大学について誤解したこと、学んだこと

日本語学科一年 南 元美

はじめまして。韓国から

来た南 元美といえます。

日本に来てから二年。さま

ざまな出来事がありました。

そのなかでも今日は「麗澤



大学について誤解したこと、学んだこと」というテーマで話したいと思います。日本に来て一番思い出になったのは、やっぱり大学に入ったことです。日本で日本語を勉強しながらも、日本人にはまったく関心がなかった私にとって、この大学は日本人に心を開けたところでした。人見知り（日本人にだけ）が激しい私にとって日本人は近づけない存在でした。この学校に入る前には日本語学校に通っていました。そこでも外国

人はたくさんいましたが、みんな同じ立場で同じ目標を持って勉強している人々だから、お互い下手な日本語で話しても理解してくれたり、直してくれたり励ましてくれたりしながら、楽しんで通うことができました。しかし、私の立場と違ってnativeである日本人。何だか偉そうに振る舞っている感じもするし、冷たい感じもして、話しかけるにはかなりの勇気がないとなかなかできないものでした。

日本人と仲良くなるきっかけになったのは麗澤大学の新生オリエンテーションの時、谷川に行ったからです。最初はみんな新しいもので戸惑うばかりでした。気まずい雰囲気についついスケジュールまで。「何でこんななのやるのよ」と思うほどでした。しかしそれは少しの間だけでした。慣れていくにつれて雰囲気も盛り上がり、だんだん話すようになった学生たち。もっと驚いたのは自分から話しかけて、分らないものとかも親切に教えてくれる日本人の姿でした。「やっぱり世の中って悪い人なんかいないんだな」「何で自分のせいだとは思わなかったのだろうか」。私は自分自身

に問い返してみました。それ以来私は、日本人と快く話せるようになりました。今考えてみるとちよつとした誤解を抱いていたみたいです。

「麗澤大学」というところ。はじめて見たのは学校の面接の日です。何か私が思っていた大学とは離れている感じで、あまり広くもなく静かすぎて何もないなと思い、それほど気に入ったところではなかったのです。ただ、授業内容とかが私がやりたいものとあつていて、それだけの理由で入ることにしたのです。ここに来る前、川崎（都会とは言えないけれど、南柏よりは…）で暮らしていた私にとって、南柏というところは田舎みtainなところでした。しかし実際に学校で生活して分かったことは、「麗澤は狭いところではないし、学生にとって必要なものは全部揃っているところだ」ということでした。勉強したい人にとってこれほど親切なところはありませぬ。それが分かるにつれて私の生活は一変しました。

一学期にはダンスサークルに入り、みんなでダンスの練習をし、テニスサークルにも入って週一回か二回

くらいは運動もできるようになりました。それに日本人の友達もたくさんできて、毎日が楽しくなりました。私は、自分がやりたいことがあれば学生のうちにやっておいたほうがいいと思っています。別に自費を使わなく済ませる。しかも、いろんな国からきた外国人の友達もできて、それぞれの文化や習慣などの話題で話し合ったり、食べ物を作ったりもできるし、他のところでは味わえないものがここにはあるのです。自分が学びたいものを楽しく教わり、先生の話に夢中になつてうなずきながら聴くと言うのは私にとって一番幸せなことでした。

この先も麗澤に通いながら、自分がやりたいことを全部やってみたいと思っています。せっかく日本に来たのです。無駄な時間を過ごすわけにもいかないし、何もやらないということは自分の生活を捨てるといふのと同じだと思ひます。「遅いと感じたときが始まりだ」という言葉があります。今からでも遅くはありません。やりたいことはどんどんこの麗澤でやっつけていきましょう。

## 学生の関心を高めるために工夫を重ねて

外国語学部非常勤講師 山田 順



「大学に来てまで、なぜ道德の授業なの?」——授業の開始にあたって、いぶかしげな表情を隠さない履修学生たち。だが、期末レポートでは「道德について学べてよかった」「心づかいや生き方を見直そうと思う」と書いてくる。

便利で豊かな時代にあって、毎日のように見聞きするのは、喫煙や携帯電話使用のマナー違反、駐車違反をはじめ、窃盗・殺傷事件や各界各層での不祥事などである。そんな社会の中で、道德に関心の持てない学生を相手に、正味九十分間の授業を進めるのは容易なことではない。

私のクラスでは、はじめに三つの約束をさせる。

①机と椅子をそろえ、最後列には着席しない。②着席した周辺のごみを拾う。③他の人の妨げになる私語は慎む。簡単なことのようにだが、実はこれがなかなか守られない。また毎回、授業の終わりに簡単な感想や意見を書いてもらう。これで、出席確認と学生の関心を窺うことができる。皆に知らせたい良い気づきが記入されている場合は、次の授業で紹介することもある。書いてもらったメモは、少しばかりのコメントを記して(多くの場合、赤ペンで下線を引く程度だが)一ヶ月後をめどに学生に返す。

さて一学期は、『自他を生かす道』(モラロジー研究所編)をテキストにして、モラロジーの考え方について



で紹介しながら、現代社会における生き方としての道徳の重要性を考える講義を進める。そして二学期は、学生自身の調査による人物研究を行い、郷土の先人たちの意志を貫いた生き方について学び考える。こうして道徳とは、マナーや規則を守ることにとどまらず、考え方や生き方にかかわるものだという理解を深めてもらう。

テキストは、これまで長く『モラロジー概説』（モラロジー研究所編）を使用してきた。前半の基礎編の内容については関心や興味を示すが、後半の実践編に入ると、何か特定の価値を強要されているとの反応が表れる。現在は『自我を生かす道』（同編）を使用して、これまでにない良い感触を得ながら授業を進めている。

他方、午後一番の授業で、一方的な講義だけでは飽きるので、途中からビデオの視聴（主として民放番組「知ってるつもり」の録画）を入れる。その感想に、「名前は知っていたが、これほど偉大な人であることを知れてうれしい」「このような人に会ってみたい」

「このような生き方を見習いたい」など、感動の記述が多い。また気分を変えるために、ちょっとしたワークも時折行う。椅子座禅、傾聴、人間相関図、人生曲線、母の日の手紙投函など。また、事前に予告してイベント（討論）もする。テーマは、「人類（あるいは道徳）は進歩してきたか」「一人の力は大きいか、小さいか」など。

授業途中に学生に意見や感想を求めるが、ほとんど手をあげない。指名すると、やっと少し言うだけ。しかし、期末レポートに授業についての感想や意見を添付してもらうと、「もつと他の人の感想や意見を聞きたかった」と記入する。

授業内容で学生が一番関心を持つのは、自分さえよければという自己中心的な心づかいと行い、今様でいうジコチューの生き方に対する気づきと反省である。身近な友人関係、クラブ活動やアルバイト先などにおける人間関係のつまずきからか、他者に対する思いやりの必要性についての理解が深まる。さらに授業が進み、自分たちがどれほど親や社会の恩恵にあずかって



人物研究発表後に、感想、コメントを書く学生たち

いるか、その認識をもって感謝することの大切さにも気づいていく。万事、当たり前前の生活に慣れてきた学生にとって、この事実の発見は新鮮な感動を覚えるようだ。一学期の授業最後のメモや期末レポートには、「失いかけていた自分を取り戻し、自分の人生を見直すことができた」「人間のもろさや弱さに気づいた」「自分のことだけしか考えない視野の狭さを反省することができた」「自然をはじめ多くの人々と社会の仕組みに支えられて生きていることがわかった」「改めて学生生活しているわが身のありがたさを感じる」「自分を大切にして社会に貢献できる生き方をしたい」「この授業で学んだことを、たくさんの人に伝え、共感していきたい」などの記述が多く見られる。

二学期の人物研究とその発表では、郷土の偉人を中心に日本や世界の著名な人物を選んで参考図書調べのほか、できるだけ現地視察（夏休みにゆかりの地や記念館の見学）をふまえてレジュメを作成し、一人十時間て発表してもらう。最近では、図書よりもインターネットのホームページを利用する傾向にある。発表

## 今日社会の道德の現状と講義内容からの気づき

ドイツ語学科一年 吉田美紗子



いつも足早に通る道を立ち止まって、あたりを見渡してみてください。自分が歩いている時とは景色が少し違って見えませんか。ビ

「その人物が尊敬を受け評価される理由がわかった」  
「人物の悩みや境遇に共感し、その不屈な意志の強さに感銘を受けた」などという感想や、「自己利益ばかりに走る人が増え、そんな世の中に慣れきっている自分だが、社会のために貢献した○○の生き方を見習いたい」「○○は自分の師ともなり得る人だと思う」と、これからの生き方の模範にしたいと述べる。

正直言って、授業に苦痛を感じることもしばしばだが、この大学だからこそやれるこの授業の存在価値は確かにあり、今後も授業内容の工夫を重ねていきたいと思う。

ルが高さを競って建ち並び、街中は携帯電話を片手に歩いてゆく人々に溢れています。歩き煙草をしている人もいますね。また、耳を澄ましてみてください。どんな音が聞こえますか。風や雨音、話し声や工事現場の音など、色々な音が聞こえると思います。読者はこれをどのように思われるでしょうか。些細なことと思われるかもしれませんが、しかし、その些細なことの繰り返しの中にこそ、私たちが幸せに導くものがあるのだと私は考えています。

道德というのは、私たちが普段生活をしていく上で、ごく身近に存在しているものだと思います。そして道德は、社会で人々が幸せな生活を送るために必要不可

欠なものではないでしょうか。では、どのような道徳が必要とされるのでしょうか。私にとって一番身近な電車内のマナーを例にとつて考えてみます。

私は大学に通うため、電車を交通手段に利用しています。地元の駅から約一時間半、ずっと電車に乗っているのですが、車内のマナーが最近悪くなってきていると感じます。とくに多くの世代に急速に普及した携帯電話についてのマナーです。私が利用している東武野田線では「優先席の付近では、携帯電話の電源を切り、それ以外の場所ではマナーモードにして通話をご遠慮ください」という車内放送が流れます。各駅に停まるたびに放送を行うので、乗客には聞こえているはずですが、しかし現状は、マナーモードに設定せずに呼び出し音が鳴ったり、車内で通話をしたり、あげくの果てにはそのような行為を優先席でやっている人がいるのです。それはなにも若い人だけの話ではありません。

授業で、道徳には「自己利益の道徳」と「三方善の道徳」があるということを学びました。この自己利益

の道徳というのは、自分の利害や好悪などといった一時的な感情や気分で行われることの多い道徳のことを言い、三方善の道徳とは自身の運命や人生を改善すると共に、社会の秩序と調和を促進させる道徳のことを言います。先に述べた電車のマナーを守れないのは不道徳の部類に入るか、自己利益の道徳が強いのだと思います。自分一人だけよければいいと考え、他の乗客のことを思いやれないことは大変残念なことです。快適な社会生活を送るためには、他者への配慮が大切だと思えます。

電車内に限らず、道徳が必要になっていく生活場面が今後ますます多くなると思えます。また、今日では道徳に対する一人ひとりの意識もまだ薄く、他者を思いやる気持ちも伝わりにくくなっています。しかし、そのような今だからこそ、生き方にかかわる道徳について考える時ではないでしょうか。より良い時代のために、個々人の意識の改革が必要なのだと思います。

# 道德科学の授業について

— 考える力をつける —

国際経済学部教授 望月 幸 義



## 一、道德教育の重要性

個人の幸福と人類の平和実現が建学の精神である。そのためには、個人個人の道德性を高めること、つまり品性の向上が根本である。品性は、知識や技術に方向性を与え、知識や技術を有効に生かす力をもっているからである。

私は学生に道德への関心を深め、自主的、積極的に道德性（品性）の向上に努めるような人間になるよう導くことを目的としている。

個人の幸福の実現と社会平和の実現は密接な関係をもっている。個人の品性を高めることが個人の幸福実

現に役立ち、同時に社会平和の実現に貢献しているのである。

私の授業の主眼は、すべての人が求めている個人の幸福の実現の方法を提示することにある。世界中の人が幸福の実現を求めており、そのために大切な力についてある程度共通の理解をしている。それらの力とは、学力、知力、権力、体力、金力、容貌の力などである。確かに、これらの力は大変役立つ重要な力であるが、これらの力以上に大きな力が存在していることが十分に理解されていない憾みがある。それは精神（心）の力である。

モラロジーの創建者廣池千九郎は、道德の実行は、

精神作用（心づかい）の問題であることを発見し、これまでの具体的に形に出して良いことを行うことを道徳実行としていた考え方が不十分であることを指摘している。精神作用（心づかい）こそ重要なのである。精神（心）が大きな力をもっているから、それらの力の發揮の仕方を伝達することは、建学の理念そのものであると考えている。

現代は心の時代と言われている。これは、心（精神）が大きな力をもっていることの理解が深まり、多くの人々が心の力を發揮することに興味と関心をもつてきた時代ということである。これは、上記の建学の理念とも一致するものである。

心の力を發揮するにはどのようにすれば良いだろうか。まず、心の働きのついて理解する必要がある。心の働きは、知的働き、感情的働き、意志的働きの三種に分けて考えることができる。これらの働きはさらに細かく分けることができる。つまり、知る、理解する、判断する、考える、計算する、記憶する。想像する、愛する、喜ぶ、悲しむ、感謝する。尊敬する、感動す

る、信じる、願う、欲する、決断する、祈るなどである。これらの働きは大変大きな力を發揮するが、知る、計算する、記憶するなどの知的働きの一部を除いて、これらの力を十分に有効に使用しているとは言えないだろう。それは、これらの力の發揮について、学校教育で適切に取り上げていないからである。これらの力を涵養することが、道徳教育の眼目であることが、文部科学省の道徳の学習指導要領に示されているが、小・中学校の道徳教育で適切に実践されているとは言えないだろう。それは、知的働きの一部を除いて、教育する材料が不足しているからである。それは、結局、大学の教授陣が十分研究していないからであろう。

私の道徳科学の授業では、これらの心の働きのうち、特に、考えること、喜び、愛、感動などの力の増加を狙いとしている。特に、考えることを重視している。それは、考えていることが大きな力をもっているからであり、考え方を換えれば、力を変化させることができるからである。結局、すべての原因は、自分の考え方にあるのである。このように、考えていることが大

きな力をもっているから、考え方を変えることは大きな効果を生み出す。そこで、考え方を変えることが最も重要な道徳実行であるということになる。そうだとすれば、私の授業は、道徳の実行をしてもらおう授業ということになる。

## 二. 教育方法

学生はこちらが講義すると、熱心に聞かないことが多い。そこで、私の授業では、講義はなるべく少なくして、学生自身が問題について考え、自分の考えを表現することを中心としている。学ぶことの意味、頭の良いということ、考え方を変える、喜びの作り方、道徳実行の方法、自分について考える、愛について、感動する方法、精神力の発揮などについて、自分で考えたり、意見を発表させたり、これらの問題について書いてある文章を読ませて、感想を書かせている。

また、時々講義を入れながら、それぞれのテーマについて、より良い考えができるようにすることが狙いである。

## 三. 授業の効果

高等学校までの教育は、○×式の教育が中心であり、これは記憶重視の教育であり、考える教育になっていない。考える力の養成は根本的問題である。考えることや文章化することが苦手な学生がかなりいるが、毎週授業を受けることによって、考えることや文章にまとめることの楽しさに気づく学生も出てくる。また、さまざまな人の文章を読むことによって、本を読むことの楽しさに目を開く学生も出てくる。

考え方を変える内容は、最も簡単にいえば、プラス発想をすることである。マイナス発想をしている学生がかなりいるが、授業を受けて、どんどんとプラス発想に転じる学生が出てくる。その結果、悩みが減り、喜びが増える学生、自分に自信をもてる学生が増えてくる。最も人気のある授業は、愛についての授業である。愛についての悩みをもっている学生が多いが、いろいろな愛に対する考え方があることに気づくと同時に、自分の愛する力を増加させる方法について理解を



道徳科学授業の資料の一部

深めることができ、うれしいと感じるのである。

このようなことから、この授業を受ける学生の出席率は、毎年、八割程度であり、この授業を受けて良かったと感じている学生も、八割程度である。

#### 四 学生の感想文

以下は平成十四年度に道徳科学を履修した学生の感想文の一部である。

「この一年間の道徳科学で学び、得たものはたくさんあります。その中でも特に私の心に入ってきたものは、考えることの大切さです。考えることというのは、何にでも共通してくると思いました。考え方によってよい方向、悪い方向に進んでいきます。そして、考え方を変えることは自分の力の出方も変わってくるでしょう。私は今まで、考えると感情が生まれるなんて考えたことがなかったのですが、何かを思っただけで、その結果感情をだしていると思えました」(国際経営学科 藤倉文子)

「大学に入学して最初に道徳の授業があるのが、不



思議だった。なぜなら道德の授業とは小学校までの科目であると思っていたからである。しかし、人間として生きていくうえで、根本的なものである道德は、大学生にこそ今の時代必要なものではないのかという考え方に私の中で変わっていった」(国際経済学科 秋谷典彦)

「道德科学と聞いて、最初は正直退屈な授業だろうと思いました。私が小学生のころ受けた道德の授業は、作文をまとめた教科書をみんなで読むだけだったからです。しかし、その考えは見事に覆されました。授業を重ねるごとに、道德を重視する意味がわかってきたからです。最初のころは、自分の考えを書くことが恥ずかしく、毎回書く感想文も紙をすべて埋めることができませんでした。しかし、授業を重ねていくうちに自分の考えを書くことが楽しくなりました。同時に、自分の考えに自信が持てるようになりました」(国際経済学科 小野 幸)

「この授業を受けて学んだことは非常にたくさんあります。一番のポイントは、心です。先生は『心の持ちようによって人生は変わる』と言っていました、

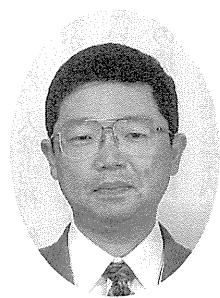
それが非常によく分かる一年でした」(国際経済学科 小川健太郎)

「私が、この授業で学んだ最も重要かつためになったと思ったことは、『人生を本当に楽しんで生きるためには、自分自身を好きになれるように変われるかどうか』ということであると思う。我々を囲む周囲のものがマイナス発想を強く含んだ言い回しをしてしまっているために、世間にはマイナス発想が蔓延してしまっているのだ。人生を楽しむためには、マイナス発想を打破し、プラス発想へと変えていくことである」(国際経済学科 海老根渉)

「私はこの『道德科学』という授業を通じてさまざまなことを学びました。この大学で道德科学と出会い、そして『自分』というものに対して、もう一度じっくりと考え直すよいきっかけとなりました。入学当初、私は初めてこの『道德科学』という授業があることを知り、いったい何を勉強するのだろうかというワクワク感でいっぱいでした。案の定、この授業は他の授業では学べないような人間としてあるべき姿や夢や希望、そして人生の目的を教えてくれたような気がします」(国際経済学科 大塚美香)

## 自分で考える授業を目指して

国際経済学部非常勤講師 大野 正 英



今期の道徳科学の授業は、テーマを「モラロジーと現代社会の諸問題」と設定して、主に前期においては「現代における倫理的諸問題」について、後期においては「建学の理念としてのモラロジー」について取り上げた。

私は、この道徳科学の授業を、①一人一人が自分の生き方について考えること、②社会で起きている様々な問題について自分と関係のあることとして捉えること、を学ぶ機会にしたいと考えている。

大学入学以前は、与えられる情報を知識として習得していくという、どちらかといえば受身的な学習に偏る傾向がある。これに対して、大学においては自ら問

題を設定してそれを自分の頭で考えていくという主体的な姿勢が求められると、私は考える。道徳・倫理といった問題は、まさに「自分はどうか考えるのか」が問われる領域である。授業の中で学生に発する問いかけにおいても、「あなたはどうか考えるのか」ということを、意識的に問いかけてきた。

特に社会科学系の学問を学ぶ学生としては、社会的な問題に対して問題意識を常に持ち続けるべきだと考える。一年生を対象とするこの授業は、大学四年間を通じて学ぶための考え方、ものの見方を自分自身で作りに上げていくための一つの機会となることを願っている。

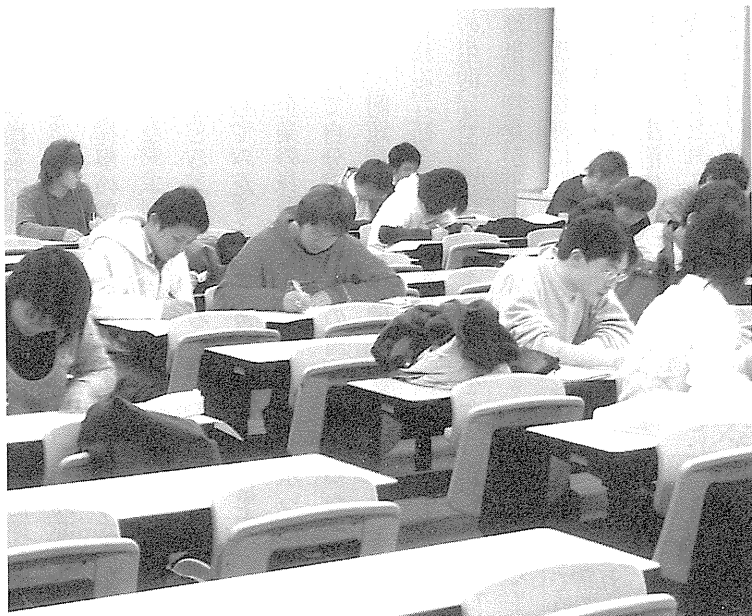
前期の授業では、主に経営倫理、環境倫理を取り上げてきた。経営倫理においては、現実に最近起きている企業不祥事の事例をビデオなどを利用して紹介したり、簡単なケーススタディを用いて自分ならどのような行動をとることができるかについて考える機会を作ったりしてみた。第三者として企業不祥事を捉えた場合には企業の行動を非難する意見が多かったが、立場を換えて自分がその問題の当事者であったと考えると、問題がそれほど簡単なものでないことに気づかされる。社会正義の観点、組織に対する忠誠心、自分の生活、こういった様々な要素を含めて考えた場合に、簡単に答えが出ないのは当然のことである。

環境倫理に関しても、多くの学生が総論として地球環境保護の必要性を理解している。しかし、それを自分自身の生活に結びつけた場合に自分自身がどのような行動をとれるのか、環境を意識したライフスタイルに変えていくことができるのかという問題には、なかなか意識が向かない。これは私自身も例外ではない。誰かを批判すればそれでよしとするのではなく、自分

自身が担う問題として受けとめることで倫理的葛藤が生まれってくる。その葛藤に気づかせることで、社会的問題に対する意識付けをすることをねらいとしている。

後期の授業においては、モラロジの基礎テキストである「自他を生かす道」を用いてモラロジの基本的な考え方を学ぶことに重点を置いた。ただし、モラロジの体系全体を理解することよりも、その基本的な考え方を提示し、それを一つの参考として、自分自身の生き方について考え、自分なりの気づきを得ることを目指した。

私がつとも学んでほしいと考えているのは、私たちが時間・空間を超えた多くの人々や自然とのつながりの中で「生かされている」ことに気づくことである。こうした「いのちのつながり」の自覚があつてこそ、自己の存在に対してより深いまなざしを向けることができ、生きる力が生まれてくると考えているからである。同時にそれは他者や社会に対して積極的なのかかわりを持つとうとする意識を与えてくれる。



大野先生の授業風景

自分自身で考え、気づく授業を目指してはいるものの、創立者の精神を伝えようとするかぎり、一つの価

値が前面にでてしまうことは避けられない。そこにある種の矛盾を感じながらも、価値の押し付けとなることはできるかぎり避けたいと思っている。しかし、生涯をかけて人間の生き方を真摯に探求した創立者の姿とその願いを伝えることによって、それを受け入れるか否かにかかわらず、学生がこれからの人生を生きていく上での何かのヒントになればよいと考えている。

学生たちの反応を授業の中でははっきりと感じ取れることはそれほど多くなく、正直にいえば自分自身に対しても、学生に対してもどこかしさを感じている。ただ、授業後に提出される感想を読むと、私の伝えたいことをきちんと受け止め、自分なりの考えを返してくる学生もいる。試行錯誤に苦しみながら、学生が自ら考える機会をより多く作り出すようにしていきたい。

### 授業のネライ

本学の建学の精神であるモラロジーについて学ぶことを通じて、

- ①一人一人の生き方について考えること

②現代社会における諸問題を倫理的視点から考えること

をねらいとする。

本学において学問を学ぶ上での基礎となるべき視点を探求し、現代社会における自分の生き方を自ら考える機会としていきたい。単に知識を増やすための授業ではなく、自分をとりまくさまざまな問題について、自分の頭で考える授業としていく。

### 授業の進め方

以下のような内容で、講義を中心にして進めるが、ビデオ視聴、ディスカッションを取り入れる。

【前半】現代社会が抱えている問題について、その根底にある倫理的問題点について理解を深めることを目指す。様々な問題について自らの頭で考えていくことよって、自分なりの視点・考え方を培っていく授業としたい。取り上げる問題としては、経済・経営倫理、環境倫理を予定している。

【後半】モラロジーの基礎テキストである『自他を

生かす道』を中心とし、大学生にとって身近な話題をとりあげながら、モラロジーの内容についての理解を深めていく。それによって、自分の身近に起こる様々な問題に対して、どのように考えて対処していったらいいかを、一人一人が考える。

### 内面深く考えさせられた

国際経営学科一年 高津 亜祐美



この授業では人として人間として大切なことを学んだと思います。道徳科学の授業を受けるごとに、今まで無関心だったことに少し目を向けるだけで様々な日常生活が変わったような気がしました。一番に感心したことが、自分自身の問題でした。今まで生活してきた中で自分はこういう人間なのか、まわりにどういう影響を与えているのかを分かっていると思っていました。家族への接し方や友達との付き合い、みんな自分の思い通りにならないとスト

レスがたまったり、物や人に当たったりするばかりで自分の性格や行動を把握していませんでした。しかし、この道徳科学の授業を受けることでそういった私の行動がどれだけ相手のことを考えていなかったか、あの時はこういう心境だったのかを考えさせられました。

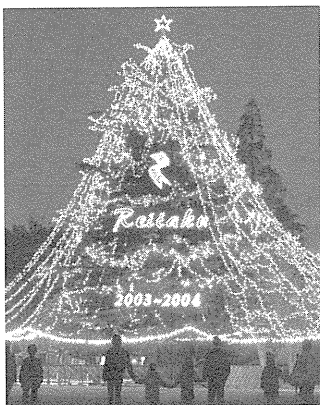
学校の授業でなかなかこのような機会がなく改めて自分自身を見詰めなおすことができ、とても貴重な時間のような気がしました。愛、精神、環境、人の心などあまり興味がなかったことでも自分と比較することで興味を持ち始め、さまざま思考ができるようになりました。何をするにしても表面的だったものが、道徳科学を通じて深く物事を見ることができるようになったと思います。一人一人がこういう授業の意味を少しずつ理解していくことによって周りの雰囲気も変わっていくことでしよう。

大学生活を楽しく過ごし、自分の満足した環境で学んでいくためには、自分がどれだけ意味を持って人とふれあい、納得のいくことをして、自分の夢にどれだけ近づいていけるかが大切だと思います。人によって生

活状況は違うけれど、最終的には自分がしたいことをするのだから考え方は共通してくると思います。そしてその中で人を尊敬するのは、自分に足りないものを持つているからではないでしょうか。だからといって人の真似をするのではなく、自分にあつた道をきちんと見つけられるかが大切だと思います。今日の状況や環境で自分がやりたいことが変わってくる中で、これと思ったものを見つけれられたときの瞬間はなかなか味わえないものです。そのために技術を身に付けるのもいいでしょう。資格を取って自分に自信をつけるのもいいでしょう。私は今までの考え方を少し見方を変えて、ゆっくり、あせらず、広く、深くいろいろなことに挑戦していきたいと思っています。その一方で周りの環境も考えながら満足した生活を送っていきたいです。

道徳科学で教わったものは上つ面なものではなく、内面的に深くまで自分を考えさせられるもので、今までにない授業であつたと今だからこそ自信をもって言うことができます。とても心に残りゆとりのある時間を過ごすことができましたと思います。

冬のひととき、学生たちの心をなごませたイルミネーションツリー（2003・12）



麗陵祭で演武する空手部（2003.11.1）



もちつき大会で楽しそうにもちをつく留学生（2003.5.7）



麗陵祭に特別参加して演奏する光ヶ丘小学校吹奏楽部（2003.11.1）



廣池千九郎記念講堂の国際会議場で開かれた「第1回麗澤国際円卓会議」。米中日の4氏が講演（2004.1.16）



就職部主催の「卒業生との懇談会」が開かれる（2003.12.6）

## ケースを中心としたビジネスエシックス — 倫理的な推論能力を身につける —

国際経済学部教授 土屋 武夫



全国広しといえど、ビジネスエシックスが必修科目  
になってきている日本の大学は、麗澤を置いて他にはない  
と自負している。国際経済学部が開設されてから、今  
年で十二年になるが、開設当初からビジネス・エシッ  
クスを担当してきた教員の一人として、社会が大きく  
変わる現代社会において、ビジネスエシックスを学ぶ  
ことの意義と重要性を考えてみよう。

### 一 エシックスの基本原則を学ぶ

ビジネスエシックスは、ビジネス倫理の基本原則の  
学習と事例研究から構成されている。図表(63ページ)  
を見ていただければ分かるように、原理論は四つの項

目からなる。

第一に功利主義の理論。行為の善悪は、行為の結果  
を見れば明らかになるとする考え方で帰結主義とも呼  
ばれる。普通の市民が善悪の判断に際して、自然にと  
る思考方法である。

第二は義務論。どんな社会にも、すべての成員が従  
わなければならない倫理規範があり、社会のメンバ  
ーは、そのルールに従うのが義務であるとする考え方で  
ある。生命の尊重は、最も基本的なルールであり、他  
人に危害を加えてはならないとする禁止原則、財産の  
尊重や、嘘をついてはならないという真实性の原則も、  
重要な遵守原則である。



第三に正義の理論。ビジネスの倫理問題は、ほとんどが財の希少性から派生する。誰に、何を、いかに配分するかという問題、いわゆる配分的正義の問題が中心となっている。

第四に暗黙の社会契約の理論。ビジネスと社会の間には、社会の資源の使用に関して、暗黙の合意がある。強力な権力センターの一つである企業が、社会の資源を、効果的、能率的に使っているかどうか。生産活動から生まれた付加価値が、関係者に適切に配分されているかどうかが体系的に吟味される。これは、権力の行使が正当であるかどうかの評価でもある。だから、ステークホルダー問題や、企業統治もこの理論の対象となる。

## 二、有効な手段としてのケーススタディー

学生はストーリーが好きだ (Students like stories)。基本的原理を学んだ学生が、それを自己のものにするには、事例研究が最も有効な手段だと考える。だが、事例研究は、簡単ではない。なぜなら、ビジネスの倫理問題 (ethical issues in business) は、多様な要因

が絡み合った複雑な性質を持つからである。学生は、これまで学んだ知識を総動員して事例研究に取り組む。これは、学生が社会で倫理問題に直面したとき、それを一人で解決できるようにするための準備教育である。学生自身にとっては、自己を磨く一種のトレーニングと映っているはずだ。

## 三、贈収賄のケース―功利主義の適用例

ここで一つ、実際に使っている事例を取り上げて説明しよう。例えば、不況にみまわれている企業城下町がある。飛行機の売り込みがうまくいかなければ、会社は倒産することになるだろう。従業員は失業し、地域の経済は壊滅的な打撃を受ける。開発中の最新の飛行機を海外のどこかの政府に、売り込まねばならない。会社の社長はあせる。

社長は、現地政府の高官が、ギャンブルで相当の借金を抱えていることを耳にする。この高官は、飛行機購入の最終権限を持つ人物である。百万ドルの賄賂を彼に渡せば、受注できると社長は確信する。もちろん

賄賂は、法律で禁じられた行為である。だが、今はそんなことを考える余裕はない。会社が売り込みに成功すれば、社員は失業を免れ、関連企業も連鎖倒産を免れる。飛行機の受注がもたらす経済効果は、計り知れない。法律違反というマイナス効果を、大きく上回っているはずだ。

だが、社長のこの推論には問題がある。自己に都合のいい要因のみに注目し、予想されるマイナスの効果を見無視している。賄賂が発覚した場合、高官は解雇されるだろう。彼が有罪となれば、家族は路頭に迷うことになる。賄賂のカネの出所は、不正なものだ。税務署の追及は厳しいから、会社の不正な会計処理は、まもなく発覚し、多額の罰金が科せられ、会社の社会的な信用は失墜するだろう。株主代表訴訟が起こり、社長は失脚し、商法違反で有罪になるかもしれない。

賄賂という不正な手段が、市場の公正という価値を破壊することも見過ごせない。市場における公正な競争がなければ、安くて質の良い製品が消費者に供給されなくなり、市民生活への影響は大きくなるだろう。

#### 四 学生が自ら学ぶこと

学生は、倫理的問題 (ethical issues) の原因が、社長の誤った推論にあることに気づく。どんな商行為にも、多数の利害関係者が複雑に関係していること、こうした利害関係者がこうむる影響の功罪をトータルに俯瞰し、評価する訓練を受けるのである。安易に法律を犯し、反倫理的な行動を取ることが、どんなひどい結果を招くかを確認する。すなわち、功利主義的推論や義務論的接近、社会契約の理論などを組み合わせ、問題の原因を掘り下げ、もたらされる結果を自ら判断するのである。これは何かを押し付けるといったタイプの倫理教育ではなく、学生が、事例研究を通して、自ら学習していく方式なのである。

ブロードバンドが普及し、動画が自由に配信できる時代になった。インターネットを使って、ライブで授業を受講できる時代、いつでもどこでも、自由に学習できる在宅学習時代の到来である。やる気のある学生にとって、こうした環境整備は福音となるに違いない。

## ビジネスエシックスの教育体系

### 原理論

- ①功利主義の理論
- ②義務論
- ③正義の理論
- ④暗黙の社会契約の理論



### 事例研究

#### 前期（A）で取り上げる事例

- 鉾山事故の事例（人命か、会社の存続か）
- 贈収賄の事例（功利主義の事例）
- 馬泥棒の事例（義務論の事例）
- 会社主義の事例（社会契約の事例）
- アメリカに本拠を置く日本の子会社の事例（社会契約の事例）
- ディスクウントショップD社の事例（市場の規制と公正問題）
- ファーストフードM社の環境対策（環境問題）
- 現代の環境問題（総合問題）ほか

#### 後期（B）で取り上げる事例

- 企業のグローバル化と三方善の事例（トップマネジメント）
- ユニオンカーバイド・ボパール工場の事故（製造物責任）
- BSE問題と食品の安全性（トレーサビリティ）
- 原子力発電所の臨界事故（工場の安全性）
- 内部告発の事例（情報の開示をめぐる問題）
- D社のインサイダー取引の事例（財務、インサイダーの事例）
- タイ人ジュリーの事例（人権問題）
- 製品を回収したS製薬（広告と製品の安全性）
- ビジネスエシックスにおける徳の理論（経営の国際化）
- その他



〈学生が身につけたこと〉

【評価（試験）】 - 文章題、基本用語、事例研究（短いもの）

ゼミやグループ学習もまもなく、e-learningを使うて行うことが可能になるだろう。問題は豊富なコンテンツを用意することであり、参加者にどのようなモチベーションを与えるかである。だが、忘れてならないこ

とは、相手の言うことを正確に理解し、自分の言葉で発信する能力を養うことだ。これこそ、e-learningを成功に導く前提条件なのである。事例研究は、こうした能力を養うことになる確実な教育方法なのである。

## 情報倫理教育

— 職能としての情報倫理、マナー、セキュリティ —

国際経済学部教授 大塚 秀 治



情報倫理は国際産業情報学科の一年生の必修科目として開講されている。国際経済学部の他の学科の選択科目ともなっており、受講者は多い。この科目の目的は、職能として情報倫理教育やマナーやセキュリティについて指導できるようにすることである。つまり、利用者教育（消費者教育）に必要な知識を身に付けてもらう点にある。そのため、一年生を対象としているが、ネットワークの構造や基本技術、関連制度などについても解説を行っている。

近年、初等教育での情報化が推進され情報基盤の整備が進んでいる。これを受けて、大学での情報倫理教育は終焉を迎えたという議論が行われた時期もある。

しかし、大学においても依然として消費者教育が求められている。それはまず、初等中等教育における取り組みの格差の問題によるところが大きい。「情報」の教育は始まったばかりであり、学校間での指導内容や取り組みの内容の差が大きく、学生の知識や経験の格差も大きい。次に、留学生への教育も必要となる。留学生の知識や経験や文化的行動様式の格差は、初等中等教育による学校格差の比ではない。従って、関連法制度を大学で初めて学ぶことになる学生も多い。大学において情報倫理や情報モラルといった科目の重要性は依然高い。一般的には、この様な内容は情報基礎科目の中で数回扱われる程度であろうが、先にも述べ

たように本学では職能として情報倫理教育が可能な人材の育成を目指している。

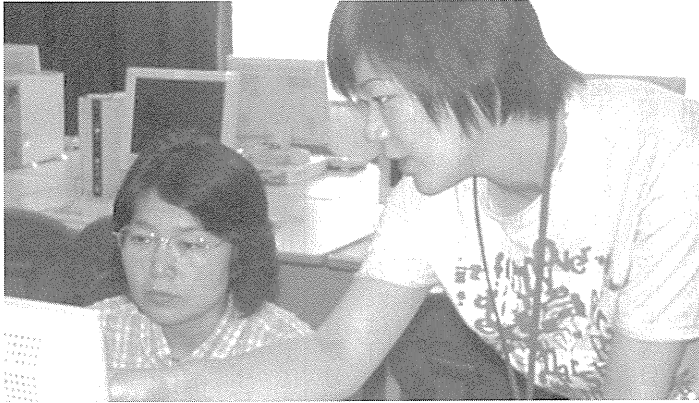
本学の「情報倫理」はまず、ネットワーク上で消費者として被害者・加害者にならないための知識を身に付けるが、さらに一歩進めて、職能としての知識を学ぶことになる。例えば、ネットワーク上では通信内容の盗聴が可能であるが、なぜ可能なのか？ それを抑止する技術はあるのか？ より安全に利用する方法はあるのか？ ということを学び、その内容を他者へ教育することができるだけだけの知識を身に付けることを目的としている。

現在の情報社会の中核技術はインターネットである。このインターネットはもともと研究用ネットワークとして発展してきた。研究用ネットワークであるので、基本技術の開発やネットワーク相互の接続や運用はボランティアベースで行われてきたものである。ほんの十数年前までは、技術者がボランティア集団を構成してネットワークの維持・発展に努めてきた。そこには、「インターネットの戒律」にも等しい不文律が

あり、インターネットを利用するためのルールが存在した。例えば、ボランティアに運用されるネットワーク上で商売を行うことは道義的に許されないし、趣味の利用で他の利用者の通信を阻害する行為は行われなかった。いずれも技術に裏打ちされたものであり、他の利用者（つまり研究者や他のネットワーク）へ迷惑をかけないことが大原則としてルールが存在した。そこでは、今日のような情報倫理教育は不要であった。つまり、インターネットを利用するためには、きちんとした技術と理解が必要だったからである。

しかし、今日では商業利用のためのネットワークが作られ、インターネット自体も一部を除いてビジネス中心に利用されている。好むと好まざるとに関わらずネットワークを使う必要性が出てきたわけである。また、教育などの分野では、それを有効利用することで新しい可能性が生まれてきている。しかし、インターネット自体が巨大化して十数年前には考えられなかったようなセキュリティハザードも多い。利用者の激増に伴って悪人の数も増大するし、悪い技術も発展す





プログラムを実施している。これは、大学の夏休み期間を利用して学生が学校に常駐してサポートを行うものである。通常の利用支援の他に、ウィルスやワーム

の対策や駆除を行うこともある。この他にも障害者を対象とするIT講習会のアシスタントとして協力することや、国際理解教育のために留学生がテレビ会議システムを通じて小学生と遠隔会議を行うこともある。もちろん、留学生自身にテレビ会

議システムを運用する技術があるから実現できることである。

また、本学と白井市とのボランティア協力協定により、市教委が開催する教員向けの研修会を学生が講師となつて実施している。学生が、白井市の学校のホームページの製作を行い、メンテナンスの方法の他にセキュリティ対策や著作権についての指導も行っている。

授業で学んだ知識や技術を、実際に社会貢献活動を通じて更に理解を深めることができる。学生も本物のシステムに携わることで自信を得ているようである。そしてこのような経験を生かして、多くは情報プロパーを目指し社会人として巣立っていくのである。

(注) KIU (柏インターネットユニオン)

学校教育ネットワークの運用と支援を行う団体として、(財)モラロジー研究所と(学)廣池学園によって平成九年に設立された団体。平成十三年より特定非営利団体(NPO)として活動を行っている。柏・沼南地域を中心に学校情報化の支援活動を幅広く行っている。平成十二年度に柏市教育功労賞を受賞。

## 環境文化研究

### ―「水」を通じて現代文明を省みる―

外国語学部助教授 犬飼孝夫



われわれは自然にいかに関わりかけ、今日の環境を作り上げてきたのか。われわれは自然といかに関わるべきなのか。自然・環境・文化・歴史・倫理をキーワードとするこうした問いを、わが国とアメリカをはじめとする諸外国・諸文明の状況とを比較する視点を持つつつ、人文科学的に探求することが「日米の環境文化研究」と題する私のゼミの目的である。

最近の卒業研究のテーマとしては、アメリカ西部開拓史、手賀沼と千葉北導水路、国立公園制度の日米比較、宮崎駿作品に見る自然と文明、アメリカの環境教育の歴史と現状、さらには、タイの環境問題と日本企業の関係など多岐に及ぶ。

さて、私のゼミではこの数年、「水」をテーマとして取り上げてきた。地球表面の約七割は水で覆われている。そしてわれわれ人間も体重の約七割は水である。まさに水は「生命の源」なのである。また、古代ギリシャの歴史家ヘロドトスが「エジプトはナイルの賜物」と称したといわれているように、ナイル川の水を用いた灌漑農業によってエジプト文明が発展した。このように、水は生命と文明の発展にとって必要不可欠なものである。

だが、水をめぐむる状況は、全世界的に危機的なものになっている。一九九五年八月、世界銀行で水問題を担当していたセラゲルディン副総裁は「二十世紀には



石油争奪が原因で戦争が勃発したが、来る二十一世紀には水獲得問題が原因となって戦争が発生する可能性が高い」と述べ、「水の世紀」の到来を予測した。

そもそも、地球は「水の惑星」と呼ばれ、地表の約七割が水で覆われているが、そのうちの九七・五％は海水である。残りの二・五％が淡水なのだが、その大半は氷山や氷河などとして封じ込められており、生物が利用可能な淡水は地球の全水量の〇・八％に満たない。地球のすべての水を五リットルの容器に詰めたとすると、利用可能な淡水は茶さじ一杯にも満たないものである。

この茶さじ一杯に満たない貴重な淡水の配分は世界的に不平等なものであり、人口増加とそれに伴う灌漑農業の拡大などのため、ますます不足しつつある。国連の資料によれば、二十世紀には水の需要が人口増加の二倍の速さで増加し、特に中東・北アフリカ・南アジアの人々は慢性的な水不足に悩まされている。世界人口の六分の一、十億以上の人々が安全な飲み水を利用できず、水の供給や衛生施設が不十分なことによる

病気が原因となり、毎年二百二十万人以上の人々が死んでいる。先進国のトイレを流す一回分の水量は、開発途上地域の平均的な人が洗濯・飲み水・掃除・料理に用いる一日分と同じ量であるという。こうした現状を受けて、国連は二〇〇三年を「国際淡水年」(International Year of Freshwater)とし、各国政府に水資源を分かち合う即時行動の必要性を呼びかけた。

世界の淡水をめぐるこうした状況は、水道の蛇口からいつでも清潔な飲料水が出てくる状況を「当たり前」と思い込んでいるわれわれ日本人にとっては想像しがたいことであり、ゼミ生は世界の淡水をめぐる現状を知るにつれて衝撃を受け、われわれがいかに恵まれた生活をしているのか、そしてまた、自分たちがどれほど水を無駄にしているか省みるようになり、われわれにできることは何なのかと考えるようになっていく。

雨として降った水は、川の流れとなり、途中で大地と生命を潤し、やがて海に流れ出て、蒸発して雲となり再び雨となって降ってくる。このように、地球上の水は「水循環」と呼ばれる大きな自然の循環を繰り返



2003年度犬飼ゼミの3・4年生

している。体重の七割が水であり、循環を繰り返し返す水を利用して生きているわれわれ人間もこの大きな循環——「環<sup>わ</sup>」——の中で生きている自然の一部である。そもそも、体内に無数の細菌が棲みつくわれわれの身体そのものも一つの生態系であり、「自然」なのである。こうした自覚を持つことがまず必要であろうと私は考える。解剖学者の養老孟司氏は「身体は川と同じである。川はいつもそこにあるが、水はたえず入れ替わっている」と述べている。外なる自然も、内なる自然（われわれの身体）も常に入れ替わり、変化している。まさに麗澤の校歌にあるように「日々に孜々<sup>しし</sup>」なのである。

学生がこうした自覚を、自然と実際に関わり合い、自然を体感する——「環」の一部に戻る——ことによって得ることができればと、私は常々考えている。水資源に恵まれたわが国は「瑞穂<sup>みずほ</sup>の国」と呼ばれてきた。それは瑞穂——みずほ——が実る国ということである。稲作に水は欠かせない。水が引き込まれた水田は農薬が過剰に用いられない限り、様々な生物の生息

地となる。天皇陛下は皇居内の生物学御研究所の水田で、種籾たねまきのお手まき、お田植えをなさり、秋には実った稲穂をお手刈りしておられる。こうして陛下も自然と関わっておられるのである。われわれも陛下に倣い、麗澤の学園内に小さな水田を作り、園児・生徒・学生・教職員が稲を育て、稲穂を収穫するというプロジェクトを始めてみてはどうだろう。学園内に里山の自然を再生するのである。水田での作業は自然、生命、物質の循環について学ぶ格好な環境教育の場となることだろう。

そもそも「麗澤」の「沢さわ」とは、「低くて水がたまり、葦あしや荻おぎなどが茂った地」のことであり、麗澤とは『易経』の言葉で、隣り合う二つの沢が互いに潤しあい、周囲の草木も青々と生い茂っている様子を意味している。「水の世紀」といわれる今日、麗澤のキャンパスはその名が示す様に、水や水環境を手がかりとした環境教育の中核的研究教育拠点となるべき使命があるといえるのではなからうか。

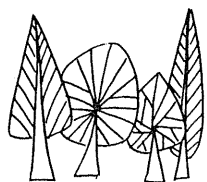
#### 《参考文献》

高橋裕『地球の水が危ない』岩波新書、二〇〇三年。  
サンドラ・ポステル著、福岡克也訳『水不足が世界を脅かす』家の光協会、二〇〇〇年。

マルク・ド・ヴィリエ著、鈴木主税他訳『ウォータ―世界水戦争』共同通信社、二〇〇二年。

モード・バロウ、トニー・クラーク著、鈴木主税訳『「水」戦争の世紀』集英社新書、二〇〇三年。

養老孟司『いちばん大事なこと―養老教授の環境論』集英社新書、二〇〇三年。



## 私を変えたボランティア活動

国際産業情報学科三年 劉 海梅



二〇〇〇年の春、不安をたくさん抱えて、日本へやってきた。まず、言葉の問題、それから、習慣の違い、生活や食べ物などなど、あらゆる面からのプレッシャーを受け、ストレスに耐えられなくなり、厄介な腎臓蛋白が出て、病院に通うことになった。そのとき、日本の保証人をはじめ、学校の先生方、クラスメートたちが皆で支えて、励ましてくれた。言葉が通じなくても、心底から温かいものを感じた。そのとき、はじめて、麗澤大学っていいなあと思った。元気になった私は、どうやったら皆に恩返しできるのかを繰り返して自分に問うた。その答えは、「まず、日本語をしゃべれるようになるう」だった。自分から積極的に日本人と

交流し、会話練習の相手を見つけ、日本語の猛勉強をした。もっと日本人と交流ができるように、もっとこの社会が知りたいと思って、別科日本語研修課程から国際経済学部へ進学した。

でも、大学に進学したばかりのときは、なかなか日本人のグループに入れなくて、一時は寂しかった。そんなとき、私はパソコンの勉強を始めた。パソコンの電源がどこにあるのかさえ分からなかった私は、知識だけでなく何事にも熱心に、困った人につつ一つ丁寧に教えている先輩TAたちの姿をみて、すごく憧れた。これが私の目標だと思い、目指し始めた。これがきっかけで、私は情報システムセンターのTAになった。

自分と同じように困っている留学生や後輩達に自分なりに精一杯尽くそうと決めた。

ゼミの選択の時を迎えた。皆と同じように、悩みに悩んだ。「大塚ゼミに入ったら、ゴミ拾いをしなきゃいけないんだよ」「大塚ゼミに入ったら、PC工房で再生作業をしなきゃいけないんだよ」「大塚ゼミに入ったら、アルバイトする時間はなくなるよ・・・」と地獄のような厳しい噂を耳にした。どうしようかと私は迷った。今まで、国で甘えてきた私が耐えられるのだろうか、大丈夫だろうか？「オタク」って友達に笑われるのだろうか？・・・。「だろうか？」をたくさん持つて、とにかく見学に行こうと決めた。そこで、私は心を揺り動かされ、大きく変わった。皆が笑顔で天井を開けたり、上ったり、壁に穴を開けたりしていたネットデイの姿、楽しそうに一日三食インスタントラーメンを食べたり、パソコンで実験を行っていた勤勉な先輩たちの記録を見せてもらったとき、今の時代、今の若者にありえないことだと自分の目を疑った。それと比べて、自分は今まで何をしてきたのだろうか？

正直恥ずかしかった。それで大塚ゼミを選択し、初めてKIU（柏インターネットユニオン）のボランティア活動に参加した。KIUの活動にはいろいろな活動がある。例えば、夏休み・春休みを利用して、中古PCを再生し、柏市の小学校へ無償で配布する活動をしている。また、ネットデイという活動も行っている。ネットデイとは、簡単に言ってしまうと「学校の先生、生徒、お父さん、お母さん、卒業生、地域の人達、その他ボランティアの方々皆でネットワークを作っちゃうぞ！」という活動のことである。もう少しちゃんと



ネットワークづくりで天井に配線する学生

言うならば「前記の人々が一丸となって学校などにネットワークをひくというネットワーク構築支援ボランティア」を指す。

これまで先輩たちが担当したネットデイに次々に参加した。参加する度にいろいろと異なった収穫があった。先輩の見習いをしながら、ネットワーク設計の知識と経験を積み重ね、いよいよ今年の六月、今度は自分が担当者として沼南町にある手賀中学校のネットワークを築くことになった。自分の郷里は草原と砂漠に囲まれ、給電にも困っている。その田舎育ちの私が、いま日本の子供たちにネットワークをつくってあげるのだ。夢だ！ 違っ！ 夢にも見なかった夢だ！

ネットデイは打ち合わせから始まり、下見、見積もり、部材発注、事前工事、本番工事、それから、ユーザー報告に至るまで一ヶ月かかった。ネットワーク系の知識が少なかったため、設計に当たって八方ふさがりで、とても辛かった。今思えば、研究室で徹夜作業をした次の日、友達から貰った手作りおにぎりの暖かさが手のひらを通して心に染みた。このように、先生、

先輩、同期の皆さんが授業の合間を縫って、指導し手伝ってくれたおかげで、ようやく本番の工事を迎えることができた。これまでネットデイに多数参加してきたネットの達人もいれば、初めて参加する人もいる。皆が一丸となって、班長の指揮に従い、通線したり、モールを貼ったり、天井裏にもぐったり・・・作業を手順良く進め、午後三時、待ちに待った閉会式を迎えた。校長先生が通電し、ネットワークが無事に開通したことが確認できた。盛大な拍手と花束の中、学校側より慰労のお言葉と感謝状をいただいた。その瞬間、私の体の奥から何かに打たれたような感じが湧き上がり、同時に肩の力が抜け、涙がとめどもなく溢れてきた。「ネットワークが繋がった！完成した！できた！」。心の底から叫んだ。参加してくださった皆さんもこのネットデイを通して、一人一人それぞれが、その一瞬に何かを考えていたに違いない。そうなんだ！この一瞬に繋がったのは知識のネットワークだけでない。人と人の心を繋ぐことができたんだ。皆の顔が輝いて見えた。校長、教頭先生をはじめ、教員、PTAの方、



ネットワークが完成し、学校から感謝状や花束を贈られるKIUメンバー

わがゼミの皆さん、そして、この場で応援してください。作業姿が美しい皆さんの笑顔が素晴らしい。作業者が美しい

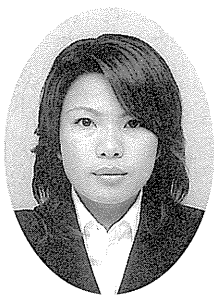
った。そして、何よりも私自身にとって、この一ヶ月は、かけがえのない一ヶ月だった。

このネットデイでの素晴らしい経験。日本に留学させてくれた両親に最高の贈り物が出来たと心の底から思った。そのチャンスを与えてくださったのは大塚先生であり、そして、その勇気を与えてくれたのは、いつも私を応援し、後方で支えてくれた強力な先輩たちだった。先輩たちはもつと複雑なネットデイを一人で二回も担当していた。

今の時代、皆がグサイと思うことを、私の周りの人たちは、なぜ、毎日、この麗澤大学でたくさん行っているのだろう。このように他の人に尽くす精神を持っていられるのはなぜだろう。その魅力はどこから来るのだろう。自己の利益のみを追求したがるこの時代、今こそ道徳であり、人間にとって真に大切なものを失ってはいけない。これからも、今までやって来たことを生かして、日本にしようと中国に帰ろうと、ボランティア活動を続けていきたい！

## プアンく出会いを大切にしてく

英語学科三年 寺 田 祐 子



私はプアン（注1）に出会って人生観が変わったといっても過言ではありません。入学前は欧米諸国などの華やかなイメージのある国々に憧れを抱いていました。しかし、プアンに出会い、「あれ!?同じアジアのことなのに、何も知らない、知ろうともしてこなかった自分がいる」そう思った瞬間、無知な自分を恥じる気持ちでいっぱいになりました。私が最初にとった行動は、とにかくサークルに足を運ぶということでした。ですから最初は先輩たちが話していることの意味も、自分がどう動いていったらよいのかもまるでわかりませんでした。

そんな私でしたが、「タイスタディーツアー」参加

という一つの転機を迎えることになりました。実際に現地の状況を目の当たりにして、都市と地方の落差には啞然としてしまいました。都市部では高層ビルが立ち並び、町は活気付き、おしゃれをしている人々、そこは日本と何ら変わらない風景が広がっていました。一方の地方（私たちが訪れたのはタイ北部のチェンライ県）では、木造建ての家に靴をはいていない子ども、身なりも本当に同じ国にいるのかと目を疑ってしまうほど、そこには見たことのない風景が立ち並んでいます。私たちが支援しているメーコックファーム（以下MKF・注2）はそんな都会とは切り離された山岳地帯にあります。





伊豆の夏合宿で

現在、MKFでは二十数名の子どもたちがスタッフと寝食を共にして、学校にも通っています。子どもたちの生活は朝五時に起床して掃除や家畜への餌やり、食事の準備をすることから始まります。食卓にはその日採れた卵や、彼らが世話をしている生け簀の鯰（なまず）も並びます。

日常生活で加工品を口にするの多い私たちは、食物の命に対して無関心になっていくように思います。彼らがためらうことなく鯰をさばっている姿を見て、子どもたちはこのようにして、ごく自然に生き物の尊さを学んでいるのだと実感しました。私たちに必要なのは、食べたいものがすぐそばにあって、いつでも食べられる幸せに気付き、感謝する心を養うことなのだと感じました。

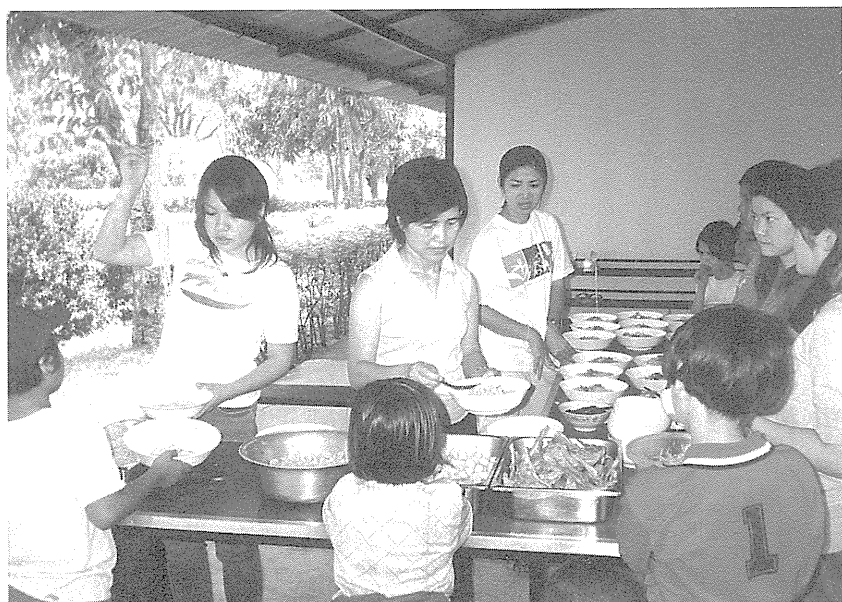
しかし何よりも彼らから学んだことは、「生きる」ということに対する前向きな姿勢です。彼らの中では炊事洗濯をすることも、勉強をすることも、食べられることも、全てが生きている証であり、最大の喜びなのです。そのように毎日を精一杯生きている彼らの姿

を目の当たりにして、改めてこれまでの自分の生活を見詰め直すことができました。子どもたちの澄んだ瞳、あふれんばかりの笑顔は私の脳裏に今も焼きついています。そしてその姿からは、彼らのおかれている境遇などは微塵も感じられません。そんな子どもたちの笑顔を消したくない、希望を持って生きてもらいたいと強く感じました。

体全体で感じ取れたことで、今まで漠然としていた活動の中にはつきりとした目的、一筋の確かな光を見出すことができました。後はどう実行に移すかが課題でしたが、学生の私だからこそできる、私なりの活動をしていこうという結論に達しました。それは、たくさんの寄付をすることはできなくても、足を使って活動することで自分が国際協力というものを身近に感じられるようになったのと同様に、より多くの人にもきっかけを与えられるのではないかと意識していました。これは私だけの思いだけではなく、サークル・ブアンみんなの願いなのです。その思いが学内外で展示会を開催したり、小学校などで国際協力について授業を

やらせていただいたりするという活動に結びついていきます。どんな小さな活動でもいい、失敗してもいい、とにかくいろいろなことに挑戦していこうというのが私たちのスタイルです。ですから、時にはみんなで交流を深めるためのスポーツ大会なども開催します。一見国際協力とは無縁とも思えることも私たちの活動の源になっているのです。ブアンには学年は全く関係なく、誰もが自由に意見を出し合える環境があります。形にとらわれないからこそ、斬新なアイデアもたくさん生み出され、発展していけるのだと確信しています。

ボランティアや国際協力は「やってあげる」ではなく、「やらせていただく」の精神で、ということを度々耳にします。私はその通りだなあとつくづく感じます。なぜなら私たちは活動を通してかけがえないものを学ぶことができているし、実は教えられていることの方がずっとずっと多いのですから。私は偶然にもブアンと出会い、かわれたことによって視野を広げ、物事を様々な視点で考えられるようになりました。また学業面でも現地で実際に子どもたちと触れ合い、もっ



タイラーメンづくりで子どもたちと交流

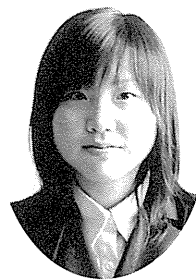
と話したい、理解したいという気持ちがきつかけとなり、翌年からタイ語を第二外国語として専攻するにいたりました。現在も楽しく学習に励んでいます。ただ楽しむ目的だけでなく、同じ思いを共有しているからこそ本音でぶつかり合える、そんな仲間と巡り会えたことに心から感謝しています。これからもかけがえない仲間と共に、合言葉である3K―気軽に、気長に、気持ちよく活動を続けていきたいと思っています。

(注1) プアンとはタイ語で『仲間』を意味し、世界の仲間と相互協力を結び、国際問題に取り組もうという想いが込められています。MKFの創設者の一人でもある、竹原茂教授の御指導のもと、普段の活動は週二回のミーティング、休日にはイベント等に参加し、民芸品を販売しています。他にもスタディーツアー、ワークショップ、委託販売等、活発に活動しています。この機会に是非ホームページを見ていただけると嬉しいですよ。  
<http://phancoolne.jp/>

(注2) メーロックファーム (Mae Kok Farm) とはタイ北部のチェンライ県にある教育支援施設で私たちが支援している施設です。

## 寮生活を通して学んだこと

国際産業情報学科三年 宮崎 めぐみ



いつからだろう・・・、こんなに寮が大好きになったのは・・・。

私は寮生活を始めて三年になります。麗澤大学を受験したことも、入寮を希望したことも、今の生活の中ではあまりに当たり前のことすぎてその経路を振り返ることすら忘れていました。この偶然のようであり必然のようでもある寮生活は、私にとって、まるで寮生活という物語の登場人物になったような気持ちがあります。

私が入寮した日、六畳一間の決して広いとは言えない、少し古びた部屋に足を踏み入れた時、正直言ってみれば寂しさや孤独感、そして不安さえも感じ、沢山の心配

が私の頭の中を駆け巡ると同時に、心も締め付けられる思いがしました。その時ばかりは寮に入ったことを後悔していたかもしれません。しかし、その心配は取り越し苦労だったようです。一日一日と時間が経つにつれて私の心は百八十度違う方向を向いていることに気が付きました。知らないうちに寮が好きになっていきました、寮生でいられることを有難く思うようになっていきました。

私の一日は寮で始まり、寮で終わります。朝起きて「おはよう」、お昼に「こんにちば」、夜は「こんばんは」「おやすみなさい」。私達寮生は、毎日当たり前のように何度も何度も挨拶を交わしています。これらの

挨拶は特別なものでもないし、たった四種類の言葉かもしれない。しかし、この平凡な挨拶は家族のような温かさがあつたり、安心感を与えてくれたりもします。挨拶自体に意味が無かつたとしても、挨拶を交わすことで私達寮生は、寮で生活していることを実感するし、心の繋がりを感ずるので。「繋がり」・・・、そう、私は寮生活を始めてから色んな「繋がり」を深く考えるようになりました。

私の住む六号館には約百五十人の寮生と一緒に暮らしています。百五十人みんな友達というわけにはいきませんが、一年経つごとに友達の輪は広がっています。新しく友達ができる度に寮生で良かったなあと心がポツと暖かくなります。

私の階には今二十九人住んでいて、その半数が留学生です。以前の私は人見知りで、自分から積極的に話しかけに行く方ではありませんでした。だから一年生の時は、留学生の友達はほとんどいませんでした。しかし、寮長という役職を与えられたことがきっかけになり、私は徐々に変わっていききました。寮長のただか

ら自分から出会いを求めていくことは自然な行為なのかもしれません。しかし、私の中では大きな革命が起こつたかのようなのです。そして私はいつの間にか人と話すことが楽しくなつて、人に話しかけるのも苦ではなくなつていたのです。留学生同士が交わす母国語を聞くたびにどこか心の距離を感じていた私でしたが、留学生との距離が縮まつていくこともそう時間はかかりませんでした。留学生と心を通わせる方法は何だろう・・・。それはとても簡単なことでした。私の中にある見えない壁を取り払うことでした。留学生と自分をいつの間にか差別し、自分とは違うものだと思い込んでいたのです。それに気づいた私は、人が変わったかのように留学生に話し掛けるようになりました。そして、留学生のみんなもその気持ちに出来るかのように暖かい笑顔を私に投げかけてくれるようになりました。私にとって大きな喜びでもありました。

それからの私は学校での生活でも積極的に活動できるようになつたし、前よりも学校に行くことが何倍も楽しくなりました。寮に入っていなかつたら、きっと



寮生と一緒に（右から3人目が宮崎さん）

私は前の私のままでしたでしょう。

生まれ育った場所も環境も何もかも違う人々が集まって生活をしていくことは決して簡単なことではありません。価値観のずれや、考え方の違いにぶつかり合う事もしばしばありました。寮にいと色んな事件があります。嬉しい事、悲しい事、信じられない事……。一つ解決したかと思えばまた一つと問題は後を絶ちません。しかしそれは全て私達人間が起こすことです。話せばお互いを理解しあえるはずです。嫌な思いをするために人々は出会いを繰り返すのではないと思うし、他人があつてこそ自分が存在していることの意味を確認できると思うのです。私はこんな寮が大好きです。寮のみんなが大好きです。表向きではなく、心からそう思えるのは人の出逢いの温かさがそこにあるからだと思います。

人間なので出逢いもあれば別れもあります。一年間で寮を出る人、留学のために出る人、家庭の事情で出る人、寮生活が合わずに出る人、卒業のために出る人、寮を出て行く人の理由は様々です。そして色々な人た

ちを見送ってきました。私も後一年で寮から去っていくこととなります。寮に入るということは出なければいけない日も来るといふことはわかっていたことです。しかし、実際その日が近づく今、心臓を強く締め付けられる思いがします。

私は寮生活で大事な人たちに出逢うことにより、大事な想いを育てることができました。それは難しいことではなく、誰かのために何かしてあげよう、何かしたい、と思う気持ちを持つことです。人と人が関わる意味や結びつきを感じると、そんな気持ちが心の中に自然と生まれてくるようになるということを知りました。それは押し付けではなく、人を想う素直な気持ちからなのだと思います。人を裏切ることよりも信じ続けることは何倍も大変なことかもしれないけど、人を信じることは悪くないし、信じてみるとその人が大切に思えたり、あったかく思えたりするのです。私はこの二十一年間、沢山の人の助けられながら生きてきました。両親も先輩も後輩も同級生も先生も寮生も学寮課の人達も全て私の大切な、大切な宝物です。この

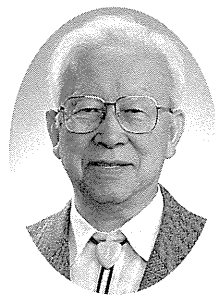
繋がりに心から感謝したいです。

目を閉じると寮で出逢った数え切れない人たちの顔が浮かんできます。みんな宝石のようにキラキラした笑顔で私を見つめています。寮は私の第二の故郷です。帰ってくる場所はここにもあるのです。私の寮生活の物語が終わりを迎えたとしても、また新たなそれぞれの寮のストーリーが始まります。一年前も今も十年後も、寮はいつまでも私の中にある暖かい寮の姿のまま、でい続けていると信じています。最後に、私と寮を結び付けてくれたもの全てに感謝したいと思います。ありがとう。



## 道徳科学専攻塾が発足

名誉教授 池田 裕



かくて、道徳科学専攻塾は発足した。前述したごと

く、狐狸の住処のような所に、突如として高等教育機

関が誕生したのである。当然、知名度は低い。低けれ

ば高くしなければならぬ。最近の大学では、知名度

を高くするために、有名タレントを呼んだり、また、

そういう人達を入学させたりするケースが多いように

見受けられる。が、本塾では、世のいわゆる名士をお

招きして、本塾の教育の崇高性、卓越性を塾長自らお

披露し講説した。

ちなみに、昭和十年以来の来賓の名を左に掲げてみ

る。

昭和十年（一九三五） 五月三日 孔子の後裔、孔

昭潤・顔回の子孫、顔振鴻

同年五月二十三日 西郷従徳侯爵・伴達也海軍大

佐

同年十一月十日 齋藤実 前総理大臣

昭和十一年（一九三六） 七月六日 若槻礼次郎

元総理大臣

昭和十二年（一九三七） 四月十八日 賀陽宮恒憲

王殿下、同妃殿下、同若宮殿下、同姫宮殿下御台臨、

九条公爵

このように次々と高名な人士をお招きしている。こ

れは決して知名度を上げんがためのことではない。が、

副次的な効果としていくらか本塾の名声を高めたかも



しない。

来賓の中でも一番塾長が喜び、心から敬してお招きしたのは、賀陽宮恒憲王殿下の御台臨であつたらう。

天皇陛下は現人神あまのひとかみである、とされていた当時の皇族の一人賀陽宮恒憲王殿下を、一私塾いちへお迎えする。それは一大トピックスになったことであろう。塾長は全身全霊、誠意を尽くしてお迎えの準備に献身されたはずである。

そのお迎えに当って新築されたのが、現在の貴賓館である。

当時、賀陽宮恒憲王殿下は、名古屋の第十六騎兵連隊の連隊長であつた。皇族の一人であり、軍隊では連隊長と名実とも最高位の宮様をお迎えしたのである。

塾長は、自ら「『旭日昇天』の思い」と述懐しておられる。宮様は、その折の塾長の心のこもつた接待ぶりがよほどお気に召したのであるか、その十月二十四日に再度御来塾なさっている。

翌、昭和十三年（一九三八）六月四日、群馬県大穴温泉の寓居にて、塾長廣池千九郎先生は、満七十二歳

の生涯を閉じた。

ついで、二代目塾長廣池千英ちひさ先生の時代に入る。

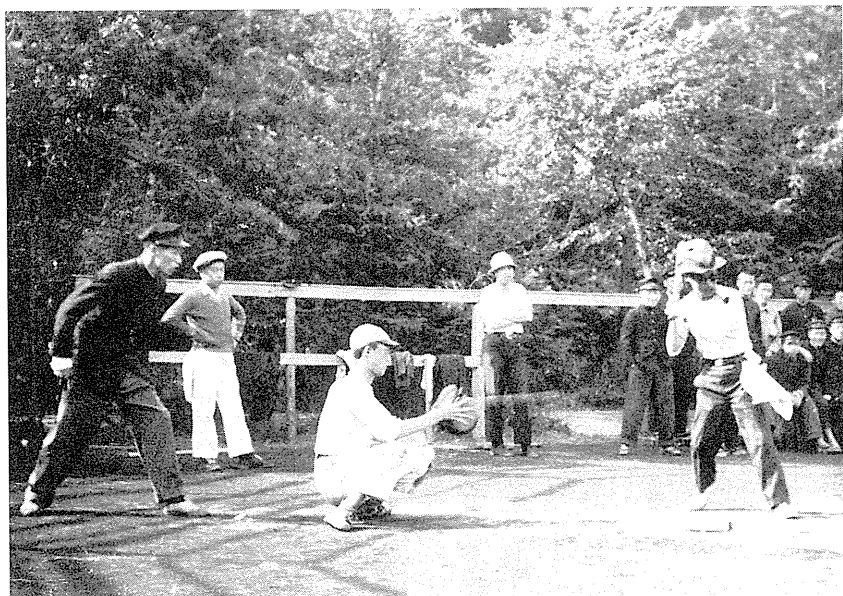
廣池千英塾長は、明治二十六年、創立者廣池千九郎先生の長男として生れ、京華中学校、第六高等学校から東京帝国大学法科政治学卒業。その後、社会で研鑽され、初代の他界後即ち、昭和十三年六月に、塾長に就任された。

曰く、「今回の就任は、一般の新任と異なり、形式のみの就任にあらずして、その根本たる精神の就任である」と。

その決意や、壮たるものを発見する。そういう期するところがおありの廣池千英塾長時に四十五歳であつた。かくて二代目塾長が、塾の舵を執られることになつた。千英塾長は、「学生とともにあれ」をモットーにしておられたようにお見受けする。

放課後は、テニスを、野球を、あるいはグリーン・ボールを学生とともに楽しまれた。

なかでも、野球をたしなまれ、自らピッチャーをかかつて出られた。先生のタマは、スローボールでヒョロ



口にパイプをくわえて野球に興じる廣池千英二代目塾長

ヒョロときてカーブするのでなかなか打てない。たま  
たま当っても飛ばない。いわゆる凡打で終って一塁で  
アウトにされる。というまさに頭腦的投球をされる塾  
長ピッチャーであった。

塾長をはじめ教職員一同が、轡くつわを揃えて、塾の教育  
は、和氣藹藹あいあいのうちに進展していった。このままでい  
けば、まことに牧歌的環境で、理想的な教育王国がこ  
こに誕生して生長していくがごとく思われた。が、  
「好事魔多し」である。困ったことが起ってきた。そ  
れは日本国が軍国主義に走っていったことに起因す  
る。モラロジ―は、個人の安心・平和・幸福を説き教  
える、これはいかん、今や大日本帝国は挙国一致して  
聖戦完遂せねばならぬ時である。ということでは何かと  
軍部による締めつけの波が、ひたひたとこの丘にも押  
し寄せるようになってきた。

ということとは、本塾の教育の根本精神に当る、モラ  
ロジ―の研究、開発、救済にも軍部の締めつけのロー  
プがかけられるようになってきた。

しかし、そのような圧迫にも屈せず、千英塾長は初

代の遺志を継ぎ、発展させるべく、塾教育の衝として努力精進を重ねておられた。

塾の三期生、浅野栄一郎さん（後、麗澤大学名誉教授）は次のような逸話を書き残しておられる。

塾生の一人が無断外泊した。寮中大騒ぎとなった。あちこち探しまわったが、どこにいるのかわからない。その心配や騒ぎをよそに本人はヒョッコリ帰って来た。無事に帰って来たので一同ほっとした。ほっとしたのはよいが、寮には寮の規則がある。それを犯したのだから当然、処罰（退学処分）されるべきである。という強硬派と、まあまあいいじゃないか、という穏健派と寮内の学生の意見は二つに分かれた。二時間余も論争したが決着がつかなかった。そこで塾長千英先生に裁断をお願いしたところ、次のようなお答えをいただいた。

塾則どおりにするのは、厳格でよろしい（塾長は、どんな意見でも決して悪いとはおっしゃらなかった）。寮則は寮則として尊重しなければならぬが、余りに寮則にこだわって人間一人を殺してしまつては、当専

攻塾の設立の趣旨に反するのみならず、第一前途のある本人がかわいそうである。

厳しいと、とかく冷たくなりがちになり、穏やかだととかく軟弱になりがちになる。どちらに偏してもいけないが、この際はひとつ、彼を助け育てる気持ちで寛く、温かく、ふんわりと抱擁してやるということはどうだろうか。こういうお答えをいただいたそうだ。

このような具合で二代目塾長廣池千英先生の教育は、スタートをきり順風満帆で大海原に進んでいった。ところが、前述したようにこの大海原が日を重ねるにつれて、大時化しげになつていった。即ち軍国主義の嵐である。

もともと本塾は、法的には「各種学校」という部類に入る学校であつて大学あるいは専門学校ではない。ということとは、兵役延長の恩典に浴さない。塾生は、二十歳に達したら、即入営しなければならぬ。塾長にとつては、これはつらいことである。何とかして兵役延長の恩典を塾生に与える方法はないものか。と考へた結果、塾を専門学校に昇格させればよいことになつた。

（つづく）

## もう一つの麗澤教育

——考え方を変え自己能力を開拓せよ——

国際経済学部教授

永安 幸正



先日、産経新聞であったか、広告まがいの記事において、どうして英語が話せないのか、どうしたらよいか、それを教えるいい本が最近何冊か出た、と紹介していた。まことに有益な記事であった。それを読んでいくと、こんな例が仮名（かめい）入りで書いてあった。佐和子さんという方の体験の話である。

英語を話せるようになりたいと願って、英語学校に、週一回通った。これまで、いろいろな教材も買ってみた。英語学習に、かれこれ百万円くらいもつき込んだけれども、どうにも上達しない、というのである。

さらに、「英語学校の教室では、六十分のうち、自分に割り当てられてネイティブの先生と直接話せるの

はせいぜい十分間くらいのもの。だから、なかなか話せるようにならない、成果が上がらない」とぼやくことになる。

ざっとこういう次第。わたしは、記事をここまで読んで来て、まさにこの点に、このタイプの人の伸びない理由があるのだな、と分かった。この佐和子さんは、記者が拵えた架空の人物かもしれないが、考え方が根本で間違っている。この点を変えなければ、前に進まない。

どこが、どう間違っているのだろうか。

第一。週に一回、おそらくひとコマが長くて六十分くらいのクラスであろうが、その程度回数で、なに

か成果が上がると期待するのは、まったく甘い。シュリーマンのような天才ならいざしらず、どだいそんな少ない回数で、外国語が身につくわけがない。実は、どこの大学でも、その程度の訓練だが上達するはずがないのだ。わが麗澤大学のシステムも、こんなものではないか。国際経済学部で見る限り、学生のみじめな現状が、それを物語るのではないか。

第二。六十分のうち、「自分の時間は十分くらい」という受け取り方そのものが、誤りなのである。「先生が自分と対応してくださる時間だけが自分の訓練の時間である」という受け取り方が、自分の人生の時間の何たるかを弁えていないことを示している。

この佐和子さんは、一週七日のうち一日、そのまた二十四分の一である六十分の、またその六分の一だけが、クラスでの英語学習の自分の時間だ、というふうにしかり理解していない。考え違いも甚だしい。まことに惜しい、残念至極。

クラスでは、他の生徒たちが先生とやり取りしているとき、その時間もまた自分の時間だと思つて、自分

も一生懸命注意して、それを聴くのである。そうすると、大体同じような表現を先生ほどの生徒にも繰り返して話されるはずだから、自分の番ではなくとも、それを一所懸命に聴いていけば、同じ表現を、生徒が六人いれば六回繰り返して、自分の耳で聴くこととなる。LISTEN TOなり。HEARにあらず。

耳で聴いたら、頭に覚え込む。自分も含めて生徒の数だけ、集中して六回同じことを繰り返せば、少々の表現くらいは覚え込むことが可能。そして、クラスで習ったことを、家に帰ってから思い出し、手で書いて、口に出して、読んで、おさらいする。

クラスで、「自分の時間は十分だけ」と諦める人は、他人が話している五十分を取り逃がす人である。その間、気持ちは萎えてしまい、注意は散漫となり、結局自分の練習の時間にしていない。授業中の私語や居眠りなどはその現れである。また、逆に出しゃばって自分だけが先生を一人占めするのも、はしたない。パランスが大事。

言葉の場合は、数学と違い、独学では正確な発音を

習えないという弊害もあるが、独学ではすべてが自身自身の時間である。クラスでも、独学なのだと思いい、そこに時々先生が来て正しい発音を示してくれるのだ、と受け取る。そうすると、クラスの六十分が丸まる自分の時間となる。はじめの佐和子さんの学習法と比べれば、少なくとも十分の六倍、六十分の学習ができるではないか。記者たるもの、ここまで突っ込んで書けば、いつそうよい記事となる。

これは架空の話ではない。こういう考えで人生の時間を使った人がいる。これは若いときの二宮尊徳の考え方であり、学習法であり、仕事の精神と方法である。尊徳は、隣家から鋤を借りるとき、なにもしないで鋤のあくのを待つのは、天から自分に恵まれた時間と仕事能力を遊ばすことであり申し訳し無いと、その間隣家の耕作を手伝った。

この記事を書いた新聞記者さんは、本の紹介だけでなく、根本たる人生の時間の使い方をもう少し改善しよう、こうした「考え方」を書き添えてくださればよかった。考え方の転換によって、人生の密度は、何

倍増えるか測り知れない。

麗澤教育では、しばしば理念上、知・徳・体一体の教育が目指され、徳を尚ぶこと学・知・金・権より大なりといわれる。しかし、口、耳、目、手足、それらを統括するのは頭脳。頭脳よりよき活用とは、知識、徳性、体力すべてにかかわる「いのちまるごと」の開発である。頭脳も体力であり徳である。「知識・学問より徳が大切だ」というような徳についての分別の思想は、用い方を誤ると低学力の人物を世に送り出すことになる。性能の悪い自動車を製造し市場へと売りに出す会社は、競争に負け、やがて倒産する。

知に弱い学生を製造し販売する大学は、知・徳・体一体に欠ける大学であり、世間の評価も下がり、卒業生の売れ行きも悪くなる。学生において学力なしの徳などはあり得ない。麗澤は、せっかく天地自然から恵まれた学生の能力を伸ばすことにおいて、まったくはしか。われわれ教員たるもの、大いに反省しなくてはなるまい。

## 「二期一会」

# 第四十回麗陵祭を終えて

第四十二代学友会麗陵祭実行  
委員会委員長 英語学科三年

中澤 正幸



今年の麗陵祭が無事フィナーレを迎え、徐々に日常に戻りつつある生活であります。自分自身の中ではやっと終わったという気持ちよりも、終わってしまったというさびしい気持ちも少し強いような気がします。それはきつと自分自身の中で、今年の麗陵祭というものがいかに大きなものであったかということを引きと表しているのでしょうか。

自分が委員長に決定したのは、昨年一月のことでした。しかしながら自分が委員長になった時の動機はあまり積極的なものではありませんでした。学友会麗陵祭実行委員会という大規模な団体の委員長に自分がなつてよいのか、果たして自分にそ

の役割を果たすことができるのかという不安な気持ちでいっぱいであつたと思います。その中で自分は、誰かがやらなければ来年の麗陵祭を行うことができない、麗陵祭を楽しみにしている局員や学生の為にも自分がやろうという一つの決意と信念を胸に、本年委員長として記念すべき第四十回麗陵祭に臨みました。

麗陵祭実行委員会の活動を行っていく上で、自分がどのような考えを持ったかというところ、麗陵祭実行委員会という組織は二つの側面を持った団体であるということです。

一つは、毎年私たち麗陵祭実行委員会の最大の



40回麗稜祭のメインオブジェ!!

法を考え、試行錯誤するのが我々麗稜祭実行委員会の第一の役目です。団体に對して、その要望にできる限りのことをする。また駄目なものは駄目と厳しく徹底する。今回委員長を

役割であるサークル、部活動、一般学生のサポート、つまり麗稜祭と参加する学生をつなぐパイプ的側面です。展示、出店、イベントの面で一緒に麗稜祭を盛り上げる学生達が参加すればするほど、この三日間のお祭りを盛大に行うことができます。その為には学生達が参加しやすい状況を作らなければなりません。しかしながら、多くの団体が参加し、来場者の方々に楽しんで頂くには一定のルールを我々実行委員会が作らなくてはなりません。この矛盾に對して、できる限りの方

務めて、双方の片鱗を見ることができたと思います。どちらを重要視すれば良いのかは分かりませんでしたが。しかしながら、重要なことは我々麗稜祭実行委員会も麗稜祭全体のことを考えて一定のルールを作っているということ。また参加団体にとっても、それは同じだということ。お互いにそのことを理解することでよりよい麗稜祭ができるのではないかと思います。実際に今回、参加団体との問題が起きた中で、お互いに譲歩しあえた時が一番成功につながるケースであったと思います。

もう一つは麗稜祭実行委員会自身も、麗稜祭に参加する学生たちと同様に来場者を楽しませる団体であるという側面です。イベントやリサイクル、装飾物や文化講演等がこれにあたります。麗稜祭実行委員会も素晴らしい麗稜祭を作るためのパーツ的存在、そのことは今まで実行委員会の活動をしてきた中で、あまり気づくことはありませんでした。学生の参加をサポートできれば、実行委員会としては成功。実行委員会は裏的存在、参加する学生たち



とは別という意識が強まる中で、自分は委員長という役職につき、全体を見ることで私たち委員会のメンバーも素晴らしい麗陵祭を作るという面で同じなのだと思います。ですから、できるだけ自己満足で終わらないよう工夫せねばなりません。この二つの側面のどちらにも偏りなく、活動を行っていくのが、麗陵祭実行委員会としての役割であると私は思います。

麗陵祭を終えた今、自分自身が己の心に誓った決意というものが、懐かしく、また自分の中で誇らしげに思い出されます。精神的に辛い状況下におかれる中で、決して忘れてはならないものが、自分が何故委員長になったのかということ。そのことを再確認することで、委員長職に臨んだ時の気持ちを思い出すことができたと思います。委員長という役職についている理由はあるのだから、その信念をどれだけ大事にすることができたかということが、常に前向きな気持ちで仕事に専念できるかどうかということに関わってきます。仕事をしていく上で、新しい

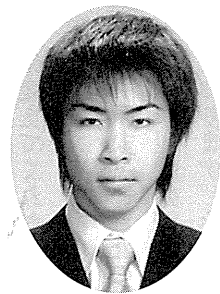
発見も多々ありました。しかしながらその原点の思いが、自分自身を支える大きな原動力であったと思います。何事も重要なことは、自分自身に課題や難題が降りかかってきた時、それにどれだけ立ち向かうことができるかということだと思っています。その時に支えになってくれるものは、自分自身の決意であったり、一緒に活動をする仲間たちであると思います。麗陵祭の中で私はそのことを再認識することができました。

最後に、本年記念すべき第四十回麗陵祭は過去最高の来場者数を記録することができました。まだまだ課題は多く残されていますが、委員長として嬉しい気持ちでいっぱいです。初めは自信なげな私でしたが、自分自身を強い自分に変えてくれたのも麗陵祭であり、「二期一会」というテーマにあるように、たくさんの人との出会いを提供してくれたのも麗陵祭でした。委員長としてそんな麗陵祭がこれからも続いてくれることを願っております。そして本年の麗陵祭に心より感謝。

## 伝統を紡ぐために

弓道部部长  
国際経営学科三年

伊 東 徹 真



部長としての最後の試合、リーグ戦男子三部入替戦において相手校と均衡状態にあった麗澤大学は、私だけが目を塞ぐ様な結果を出しながら試合を続けていた。このまま自分がメンバーにいても負けてしまふ、私は迷う事無く選手交代表に自分の名前を書き入れようとしたが後輩に止められた。以前、彼は試合の結果にこだわる方であった。そんな彼が「もし負けたとしても来年、自分達が頑張ればいいことで、とにかくあなたと最後まで試合がしたい」と言ってくれた。

それでもこの一年間は、私にとってはとにかくリーグ戦で2部に昇格する事が最大の目標であった。

というのも、今まで私が入部する以前は万年負けっぱなしであった麗大弓道部が男子に至っては一昨年、麗大史上初の中数で二部昇格は出来ずとも勝利を得たこと。昨年はあと一勝で二部昇格への切符を手にするという惜しいところまでいったこと。また、一昨年まで二部にいた女子は三部に降格し、昨年は四部に降格する瀬戸際にまで立たされたが何とかして避ける事が出来たこと。これらが起因して男女とも二部に昇格することが私の目標であった。しかし、部長になってから初めて知った事があまりに多過ぎた。それは学校の課外活動に対する後ろ向きな姿勢。部内において今までは他の役員が自分

の役割をよく認識し、上手く実行出来ていた故に部長や役員だけの問題にして他の部員には何の周知もしなかったこと。こういった事の積み重ねにより、今までも同級生の中で役員になっても仕事の要領が全くわからない者もいて苦労をした。

私が部長になったからにはこんな事にはしたくない。練習、運営のいずれにおいてもそれまでの怠惰的な体制を改革することで部内の意識改革を起こそうと考えた。弓道部に入ったからにはバイトや勉強、遊ぶ時間を犠牲にしたりするのであるから部員のみんなに四年間の部活の中で「これをやった」と記憶に残ることや、将来、自分が「大学で弓道をやってきたのだ」と胸を張って言える様にしてあげたかった。それには、試合に勝つ事が近道だと思い、先にも述べたリーグ戦に対する思いと重なった。

私は高校時代にも弓道部で部長を務めた。個人で全国出場された前部長の意思を受け継ぐ<sup>ごう</sup>として日夜練習に励んだ反面、それまでの練習に対する不真面目さ、風紀の乱れ等で学校からは廃部が囁かれて

いた。あの時もそんな部活を変えたい、そう思っただけで様々な事に挑戦し改革をおこし結果として、自分達は全国にはいけないかったものの後輩達がそんな私達の意志を受け継ぎ、見事全国ベスト8という結果を出してくれた。

だから、私はこの大学弓道部にも変化の可能性を感じていた。弓道部が大きく変化しようとする過渡期の中でみんな、とまどいや混乱を感じたと思う。私自身、指導者と意見が食い違い、怒鳴り合いになったこともあった。それでもそれらを通じて私も部員も成長出来たのではないであろうか。

リーグ戦に全敗し、入替戦を決定づけることになった前の試合で私は不甲斐なく涙を流した。自分のやってきたことが間違いであったのか、何がいけないのか。自問自答を繰り返しながら弓を引いていると自分のやってきた事が音をたてて崩れていくような気がしてどうしようもなかった。そんな時にみんなは傍にいてくれた。部員の前で涙を流したのは初めてだった。また、昨年部長になって新人戦を



一年間の成果を示す留学生も含めた部員（麗陵祭の演武から）

一週間後に控えていた私は

親友が目の前

で飲酒運転の

車に命を奪わ

れ、気が動転

し部活どころ

じゃない時に

もみんなは黙

って私を支え

てくれた。

そう考える

と、確かに部

活を引っ張っ

ていく立場で

ある私は部員に対して「少しでも何かを」と思っていたが、私こそがこの一年間で人と触れ合うこと

の大切さを教えられた。

人との付き合いが希薄になってきている現代、大

学において部活でのこういつたつながりは非常に大切に感じた。

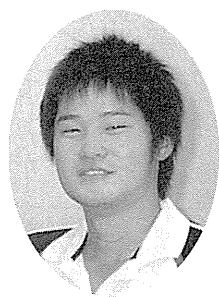
そして、私は六年間弓を引いてきて思った事がある。「和弓は、日本の文化の真髄である」ということだ。世界の中で弓を神聖なものとして、過去には生活の為、戦いの為として使用した国はあるだろうか。何故、日本の弓はあれだけ長いのか。今、これを読んでいる方がその答えを知れば日本文化の真髄と私が考える所以も理解できるはずである。

私が部長職を引退するにあたってこれから弓道部が発展する為の要素をこの一年間で残したつもりだ。弓道部という荒野を耕し、伝統という名の種を蒔いた。今度は後輩達が私の蒔いた種に水をやり、肥料をやっていつかは芽を出してもらえればと思う。また、これが卒業されていった先輩達に対して弓道部という華として添えることが出来ればいい。

私自身もあと学生生活が一年ある。それまでは後輩達のこれからの躍進と後輩達に伝統を紡いでもらう為陰から彼らを見守ることにする。

# アテネへ向けて…

国際経済学科二年 国枝 慎 吾



## 車椅子テニス：

車椅子テニスとの出会いは十一歳の頃でした。九歳の時、車椅子生活を強いられることになり、「なにかスポーツをやった方がいいのでは」ということで、母の趣味でもあったテニスを始めることになりました。私の住まいがある柏市内に、車椅子テニスのレッスンを取り入れている「吉田記念テニス研修センター（以下、TTC）」があったのは、なにかの運命だったのかもしれない。

車椅子テニスと一般のテニスのルールの違いは一つだけです。それは、二バウンドまで認められると

いうことです。練習法の違いもほとんど変わりませんが、一つだけ決定的な違いがあります。「車椅子操作（チェアワーク）」が絡んでくるということです。まず車椅子テニスでは、このチェアワークを習得しなくてはなりません。車椅子スピードはもちろん、ターンやボールへの入り方などを覚えなくては、ボールを打つことすらままならないからです。あとはテニスの技術さえ身に付けば、誰でも車椅子テニスができるようになります。

トーナメントは年間に約百大会ほど開催されています。国内でも七大会ほど開催されていますが、世界ランキング上位を狙うためには、数多くの大会に



梅田学長から表彰される国枝君

出場し、勝ち上がってポイントを稼がなくてはなりません。それは、一般のプロテニスのランキングシステムと変わりはありません。一つのトーナメントにつき約一週間の日程で行われます。高校在学中は欠席することが難しかったので、年に二大会ほどしか出場できず、歯がゆい思いもしましたが、大学生になり、ある程度自由が利くようになった現在では、

年間十二大会ほど出場できるようになりました。今年、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、ポーランド、アメリカを周り、経験を積むことによって、良い成績を残すことができました

た。

快挙…

二〇〇三年六月にポーランドで「ワールドチームカップ」という、一般のテニスでいう「デビスカップ」や「フェドカップ」にあたる国別対抗戦が開催されました。この団体戦は、二つのシングルスと一つのダブルスで勝敗を決める試合方式です。日本代表には、国内一位で世界五位（当時）でもある斎田悟司選手、国内二位で世界十八位である私、国内三位で世界二十四位の山倉昭男選手の三名が選ばれました。過去十五年近く、この大会に挑戦している日本チーム男子の最高成績は七位（三十二チーム中）でした。私はこの大会が初参加でしたが、「絶対に伝説をつくってやる」という気持ちで大会に臨みました。しかし、第三シードの日本にとっては、最悪の組み合わせが待っており、激戦が予想されました。初戦（シードのため三回戦から）は、世界三位のシユラマイヤー選手率いるドイツ、準々決勝はフラン

スという過去に優勝経験のある強豪国であったからです。この二戦に勝ち上がった後も、準決勝では第一シード、最強国オランダが待ち構えていました。「おおいおい、冗談だろ？」と初めは思いましたが、逆にこの組み合わせが私たちを奮い立たせました。

初戦のドイツ戦。まずは第二シングルスである私が入ることになりました。普段どおりにやれば絶対に負けない相手でしたが、さすがは国別対抗戦、今までに感じたことのないような緊張感がありました。しかし、順当に勝って、次は第一シングルスの齋田選手の出番。相手は世界三位のシユラマイヤー選手。大將戦に相応しい激戦でしたが、惜しくも敗れてしまい、ダブルス戦に突入しました。ダブルスではどの国にも負けない自信があった私たちは、相手ペアを圧倒することができました。

フランス戦は、シングルス二つで勝負を決めることができ、私たちは日本史上初の準決勝進出を決めました。

そして運命のオランダ戦。オランダは、車椅子テ

ニス界では男女ともに世界最強国として君臨し続けている国で、今大会の優勝候補最有力でした。世界二位のアマラーン選手と世界十一位のスターマン選手。この二人に勝つには今までやってきたことを全て出し切る必要がありました。まずは第二シングルスの私が、格上のスターマン選手との対戦でした。周りの他国の選手だけでなく、私のコーチまでもが「ちょっと厳しい」との予想でした。しかし、私の調

子は絶好調という表現がまさに相応しく、試合中も「今日は誰にも負ける気がしない」と思ってしまうくらいでした。そして6-3、6-3で勝利し、最強オランダに王手をかけることに成功しました。第一シングルスの齋田選手は、ものすごい熱戦を繰り広げました。あと一歩のところまで負けてしまいました。が、彼の気合が私の体の奥まで伝わってききました。そして、一勝一敗で迎えたダブルス。二〇〇二年の十月に齋田選手と組んでから負けなしの私たちは、最強オランダという名前に臆することなくスタートダッシュに成功しました。ファーストセットを6-

2で先取。しかし、徐々に「勝てる」という文字が

頭によぎりだしてきました。そうなるといつもの様なプレーができません。相手も調子が出てきて、セカンドセットは、1—6で取られてしまいました。そのまま悪い流れでファイナルセットも0—3になつてしまい、「もう決まったな」と周りが思い始めました。しかし、私たちには「絶対流れを変えてやる」という気持ちが残っていました。ここからはテクニクがどうこうというよりも、「気持ちだけ」というプレーでした。しかし、「気持ち」というのは、時に最高の武器になることを学びました。ここから、私たちは奇跡的に六ゲーム連続奪取に成し、遂にオランダを破りました。この時の試合展開は、あまりに必死すぎて全く思い出すことはできません。ただ一つ残っているのは、最後にスターマン選手のボールがサイドアウトした瞬間のガッツポーズと、観客の大きな拍手だけです。このダブルスは、私の今までのテニス人生で、最も興奮した試合になると同時に、私に「大きな自信」をもたらしてくれたと確信して

います。

決勝はアメリカ。アメリカもトップ3に入る強豪国ですが、前日にオランダに勝った私たちには、もはや怖いものはありませんでした。シングルス二つで勝負を決め、私たち日本はアジア史上初の世界一となりました。このような体験ができたのは、今までお世話になってきた方々のおかげであることを、この時改めて実感しました。そして、一生の思い出を共に作りあげたチームメイトに、心より感謝しました。

#### 目標：

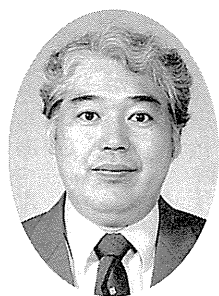
今年は、アテネパラリンピックが開催されます。私にとつてパラリンピックは、テニスを始めたときからの憧れの舞台でした。そして、その舞台まであと半年足らず…。後悔がないように、その先にある大きな何かを得るために、ゴールに向かって突っ走りたいと思っています。最後になりますが、皆様の温かい応援を、よろしくお願い致します。



# 麗澤のキャンパス、それは心のふるさと

～わが喜びの出会い～

学寮課長 吉沢和人



「砂まじりの茅ヶ崎・・・」という歌いだしで始まるサザンオールスターズの曲を聴くたびに故郷を

思い出す。それは自分の好きな場所の一つである砂浜で、遠く海に浮かぶ江ノ島を眺めている光景が一瞬にして思い浮かぶから。そのメロディーが、潮風に乗って心地よいサウンドとなって流れてくるような、「憩いの場所”であり、”安らぎの場所”だからである。

生まれ育った湘南の地から県外の高校受験（昭和四十四年）。同級生で一番先に進学先が決まって来た場所がこの柏（麗澤高校）である。それから大学（麗澤大学）に進み、卒業後縁あってこの学園に就職

（昭和五十一年）し、何時しか三十年以上経った今、第二の故郷（ふるさと）となっている。

全寮制で高校・大学と過ごし、人間としての基礎づくりの殆どを麗澤のキャンパスで学んだことになり。親元を離れ、はじめは不自由な生活からスタートし、寮生活で先輩・後輩の中で揉みに揉まれ落ちこぼれることなく、少しは心の機微を感じとりながら。大学を卒業して就職するなら迷わず学園に残ろうという気になったのは、大学時代に特にお世話になった学生部職員の方々の暖かい支援を、自分なりに形を変えて少しでもお役に立てたらという気持ちからだった。



軽音楽部で演奏する吉沢さん（右端）

はじめは父から三年ということで働き始めた。今思えば、小さいながら業界新聞社を経営していた事業を継いで欲しいという想いを残しつつ、世間を知らない息子の将来を考えて、社会の荒波に揉まれる

より少しでも人の役に立てる環境の中で、最大限に自分の力を活かせる場所を選択するよう仕向けてくれたのだと思う。そんな親の切なる気持ちを感じとれるようになったのは、研修生

制度があつた時期に一年間（昭和五十四年）寮長を引き受けた時。自分が結婚し子供ができた時。初めて親の恩を知り苦勞を知った。さらに、職員として長く学生・生徒と接する職場にいたお陰で、直接・間接に親御さんの気持ちを知らず知らず推し量ることができるようになった。人間として大切な心遣いの原点がここにあるように思う。

今こうしてふり返って見ると、昭和六十一年に高校事務室から大学の学生課に異動した。当時は、学生数もまだ一学部四学科で五百六十四名。学友会本部・麗陵祭実行委員会、そして寮生の主催する行事（寮祭）等、全てに顔を出し係わる時間もてた。学生と密に接し、時には学生の部活動（軽音楽部）の中に入って一緒にプレーしたこともあつた。まだ若かつたせいもあるが全力でぶつかっていたように思う。とにかく楽しかった思い出が残っている。

その後、学科定員増があり学部増で学生数も急激に増えた。今では大学院も出来、三千数百名を超えるまでになつてきている。年数を重ね、後輩職員も

入ってきて窓口から奥の席につくようになり、学生との接点も限られてきた。より重要な仕事上の係わりを持つようになり、どうしても業務中心の生活になった。寝ても覚めても「奨学金」の事が頭から離れない状況になり、あまりの忙しさに事務的な対応をしてしまったことも正直あった。適切な表現ではないが、奨学金のことで「腹いっぱいの状態」が続き、何時しかマンネリ化するのが怖かった。社会情勢の厳しいなか、取り扱う奨学金のことで学生対応する時、いかに公平に、間違えないよう細心の注意を払うのに四苦八苦していたように思う。

ある時、留学生を扱っている部署の先輩のアドバイスで、留学生に説明する際、この表現でわかってもらえるか、曖昧な表現をして誤解を招いていないかを考えるようになった。お陰で外国人奨学金を扱うようになってから留学生との係わりも倍増した。

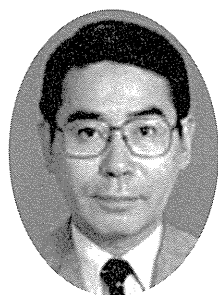
学生との接点を考えると、現在の職場（学寮課）は大変多く、また深い関わりが持てる。学生の生活の場で、教室や部活動で見せる顔とは違っているよ

うな気がする。寮の中で交わされる挨拶も格別な響きに聞こえてくる。親しみがこもった大家族のような関係が知らず知らずのうちに築かれている。日本人学生と留学生がお互いに交流を深め、とてもほえましい光景も見受けられる。

そして最後に、人知れず早朝に寮内を回り、調理室のゴミの片付けや、食器洗い、部屋の履物（スリッパ等）を揃えておられる管理人さんと寮母さん。毎日欠かさずやって頂いているのに気づいた寮長が、自分達でやることをやってみらっていることに申し訳ないという気持ちから、寮長が率先して寮を綺麗にしてくれている。そして担当の寮生達にも注意を喚起してくれている。我々職員が、ガミガミとああしろこうしろ、あれをやってはいけない、これもダメと口喧しく、また警告文を貼って・・・というのとより、自らが感じとり自分から直そうという行動にまで持っていけたら何も言うことはない。一つの何気ない行為が心に響き、自らを改め行動を起こす。そこに、麗澤教育の成果があると思う。

# 『麗澤教育』の編集に、三年間携わって

外国語学部助教授 鈴木康之



はじめに

麗澤教育編集委員会の委員長を、平成十二年度から平成十四年度まで、三年間務めさせていただきました。『麗澤教育』の編集には、第四号（平成九年度）のころから、委員として参加させていただいておりましたが、創刊号以来の委員長・水野治太郎教授が奮闘してくださっていましたので、小生などは、企画の段階で多少意見を述べたり、校正の段階で全体の何分の一かを担当させていただくくらいのことしかしておりませんでした。それが、平成十二年度から、水野教授が外国語学部の学部長に就任される

というところで、編集委員会委員長のお鉢が、小生のところに回って来たのでした。そのようなわけで、委員や事務局の皆さんと共に、『麗澤教育』第七号・第八号・第九号の刊行に携わりました。以下に、その期間にやってみたこと、感じたこと、気づいたことなどを、まとめておこうと思います。

## 一、『麗澤教育』発刊の趣旨

『麗澤教育』発刊の趣旨については、創刊号（一九九五年四月十日発行）に編者の水野治太郎教授による「発刊のことば」が掲載されています（二～三ページ）。第七号からは、その内容を次のように簡

潔に表現して、毎号、中扉の下部に表示することになりました。

### 『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活の指導者、保護者、先輩などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成七年より毎年一回発行しています。

「発刊の趣旨」とともに、「麗澤教育の理念」と「麗澤教育のめざす人間像」も、目次の次のページに掲載するようにしました（七号と八号。九号では、目次が一ページ増えたため、残念ながら割愛しました）。『麗澤教育』のような雑誌は、常に原点である発刊の趣旨を忘れないようにしていないと、焦点のぼけた内容になりかねませんので、少しやぼったいようですが、それを承知で掲載しました。

本誌は約六千五百部印刷し、年度初めに無料で配布します。主な配布先は、教職員・学生・保護者・

来学者などです。刊行費の半額は、私大協からいただけの助成金で賄っています。

## 二、雑誌としての形態などについて

### (一) 表紙

『麗澤教育』の表紙は、創刊号以来、毎年マイナー・チェンジを行い、三年ごとにフル・モデル・チェンジを行ってきました。私たちが担当した三つの号でも、その伝統を継承し、第七号で人間が地球を頭上に支えているデザインを採用し、第八号・第九号では、その色彩を変えるだけに止めました。

### (二) 写真

第七号から、写真を大量に使用するようにしました。第六号までは、写真を「麗澤大学近況」と題して巻頭の二〜三ページにまとめて掲載しており、それ以外に目を休める要素としては、カットや挿絵がある程度でした。第七号からは、まず、タイトルと執筆者名の下に、執筆者の顔写真を必ず入れるようにしました。麗澤大学の所帯が大きくなってきた今

日、その文章を書いた方が、どの方なのか、具体的なイメージを喚起するためには、顔写真が不可欠であると感じたからです。

さらに、どのページを開いても、ほとんど全ての「見開き」の中に、少なくとも一枚の写真（あるいは図表など）が入っているようにしました。ビジュアルな要素が重視される世の中になってきたので、それに対応しようとしたのですが、直接的には、小生自身が、活字ばかりが何ページも続く雑誌には食指が動かないということが原因でした。

「麗澤大学近況」という写真ページは、第七号では一旦無くしてみました。第八号・第九号では、「フォト・アルバム」という名称で復活させ、巻頭だけではなく、中程のところにも、写真中心のページを挿入しました。

なお、第七号では写真がかなり黒っぽく印刷されてしまいましたので、第八号からは、紙の種類を変えてみました。紙を変えても費用は変わらなかったのですが、印刷効果は大きく改善されました。

### (三) 「見開き」を単位に

記事の収め方については、「見開き二ページ」を基本的な単位にしました。一本の記事を、どのページから始めるか、ということに関しては、奇数ページ（本誌のように縦書きの場合、見開きにした時の、左側のページ）から始めるのが伝統的なやり方で、抜き刷りを作成する時などには、その方がすっきりした形にできます。しかし、読者が読んだりコピーを取ったりする場合には、見開き二ページが記事の単位になっている方が、より自然であり、便利であると考えられます。そのようなわけで、短い原稿は「見開きひとつで二ページ」、長い原稿は「見開き三つで六ページ」などというようにしました。

### 三、柱を明確にした内容づくり

第六号までも、〈論説〉とか〈特集〉というように、柱を立てて、内容が編集されていましたが、第七号から、その柱立てを、さらに明確にしました。〈特別寄稿〉、〈オピニオン〉、〈特集〉、〈麗大の今〉

というように、大きく四つの柱を立てました。第九号では、さらに〈温故知新〉という五番目の柱を新

設しました。

(一)〈特別寄稿〉

この欄では、第七号で速水融教授の「歴史人口学との出会い」、第九号で伊東俊太郎教授の「人類史における精神革命と現代のコモンモラルティ」という貴重な原稿を掲載することができました。速水教授は、平成十二年、文化功労者に選ばれ、その後、ご多用の中を、ご執筆くださいました。伊東教授は、モラルサイエンス国際会議(モラロジー研究所主催、平成十四年八月開催)でご発表になった原稿に改訂の手を入れてご寄稿くださいました。速水教授も伊東教授も、共に世界的に名を知られた碩学です。麗澤大学の拡充にともない、本学に教授としてご就任くださった両先生に、原稿料もなしで玉稿をお寄せいただけたのは、望外の幸せでした。

(二)〈オピニオン〉

この柱は、以前の〈論説〉という柱を受け継いだものです。第七号では水野治太郎教授(外国語学部学部長)、第八号では成相修教授(国際経済学部学



『麗澤教育』のバックナンバー(創刊号から、第9号まで)

部長)、第九号では中山理教授(外国語学部)と佐藤政則教授(国際経済学部)の原稿をいただき、麗澤大学が今後進むべき方向について、大いに論じ、提言をしていただくことが出来ました。

### (三) 〈特集〉

第七号からは、〈特集〉を大変重視する方針をとりました。その結果、〈特集〉は、号を重ねるごとに、本誌の主要部分を占める大がかりな企画になってゆきました。

第七号では「卒業生、麗澤を語る」をテーマとし、十二名の卒業生の皆さんに、自分が学生時代に麗澤教育から何を学んだか、それが現在の仕事や生活にどのように役立っているか、などについて語っていただきました。

第八号では「麗澤大学の専門ゼミ」を取り上げました。十二の専門ゼミにご登場願ひ、担当教員と現役のゼミ生、およびゼミ卒業生に、「おらがゼミ」を語っていただきました。普段お互いに詳しく知らないよそのゼミの状況が、リアルに、かつとても楽

しそうに報告されていて、大変好評な号となりました。三千部増刷されて、広報に活用されました。この特集の編集を通じて感じたことを、堀内一史委員は、次のように編集後記に書いています。

◇かつて麗澤大学は小さな大学で、師弟関係は極めて緊密でした。今では学生が増え、その分匿名性も増して、そうした関係は期待できません。しかし、本号に寄せられた専門ゼミの紹介を読むと、その判断が誤っていたことに気づかされます。教員と少数の学生が互いに切磋琢磨する場がそこにあるからです。「麗澤」という言葉が、複数の澤が互いに潤いあいながら周囲の草木にも潤いを与えていく過程を意味するのなら、ゼミでの成果を、全学的に共有できる知的資産にしていきたいものです。(K・H)

第九号では「外国人から見た麗澤大学」ここがヘンだよ麗大生!!」をテーマにしました。在学中の外国人留学生十名、外国人教員四名(内一名は、帰化されていて日本国籍)に、麗澤大学の良いところ・



へんなどころについて、大いに語っていただきました。さらに留学生三名・日本人学生三名による座談会も実施し、その内容を掲載しました。麗澤大学には、外国人留学生が約五百名（全学生の一五％）在学して居り、また、全専任教員の一五％は外国人教員です。本学は留学にも力を入れていますが、柏のキャンパスにも、国際交流のチャンスが満ちあふれているのです。この特集が、一層の国際交流を促進することに役立ったのであれば、大変うれしく思います。この特集の編集を通じて感じたことを、中野千秋委員は、次のように編集後記に書いています。

◇今回の特集に寄せられた外国人留学生や先生方の原稿を読ませていただき、「麗澤大学も捨てたもんじゃない」と嬉しく思いました。少し耳が痛くなるような指摘もありますが、それらも含めてキャンパスの「内なる国際化」が結構進んでいると感じたからです。私たちの身近に存在する異文化体験についての本音トークが、このような誌面の上だけでなく、キャンパス内のあ

ちこちで日常的に交わされるよう、その一層の活性化を図っていききたいものです。（C・N）

#### （四）〈麗大の今〉

第七号では、「麗澤大学のIT環境と情報教育、教育の情報化」を取り上げました。この分野における麗澤大学の教育環境は、近年目覚ましく整備され、全国的にも注目されています。第八号では、「麗大生の就職活動」を取り上げました。不況が長引き、厳しい就職状況が続いていますが、その中で苦闘・健闘する麗大生と、それを懸命に支援する就職部の活動が報告されています。第九号では、「道徳科学の授業報告」と「図書館のカウンターから見た麗大生の素顔」を取り上げました。

また、この柱のもとでは、毎号必ず、麗陵祭実行委員長、および、部活やサークル活動（太極拳、英語劇、剣道など）に打ち込んでいる学生に、その活動を通じて学んだことを書いていただきました。さらに、丸山康則教授のゼミからは、毎号、麗陵祭にゼミとして出展した内容やその反響などについて、

ご投稿をいただきました。

〔麗大の今〕の欄には、実に様々な教職員や学生  
の原稿が掲載されています。「麗澤の人間教育」は、  
本学の草創期以来、教室の中だけではなく、すべて  
のキャンパス活動を通じて実践されてきたのであ  
り、また、その伝統は大切に継承発展させていくべ  
きだという、編集委員会の考え方が、この欄の多様  
性を生み出しているのです。

#### (五) 〈温故知新〉

『麗澤教育』の内容は、主として最近の題材で構  
成されていますが、麗澤教育は昭和十年に開学して  
以来の長い伝統を持っているのであるから、創立以  
来の歴史を踏まえて「麗澤教育」を考えてはどうだ  
ろう、というご提言が、アンケートにありました。  
そのご提言に依えて、第九号には〈温故知新〉とい  
う柱を新設し、廣池学園・麗澤大学の歴史に詳しい  
池田裕名誉教授に「草創期の麗澤教育」について書  
いていただきました。

#### 四、チームワークによる取り組み

小生は、編集委員長長の委嘱をお受けした時、これ  
は委員や事務局の方々に大いに助けていただかなか  
れば、とても良い『麗澤教育』を刊行するこ  
とはおぼつかないだろうと思いました。そして、三  
年の間、委員（両学部から各二名）と事務局（広報  
課）の皆さまには、本当に力強いご協力をいただき  
ました。年度ごとに一部メンバーの交代はありまし  
たが、どの年度の委員会も、とてもよいチームでし  
た。以下にそのお名前を掲げ、感謝の意を表させて  
いただきます。（敬称略）

平成十二年度（第七号）

外国語学部からの委員 望月正道・黒須里美

国際経済学部からの委員 中野千秋・堀内一史

事務局（広報課） 鳥潟貞幸・米田隆彦

平成十三年度（第八号）

外国語学部からの委員 戸田昌幸・黒須里美

国際経済学部からの委員 中野千秋・堀内一史

事務局（広報課）鳥潟貞幸・米田隆彦・鈴木敦子

平成十四年度(第九号)

外国語学部からの委員 黒須里美・朴 勇俊

国際経済学部からの委員 中野千秋・堀内一史

事務局(広報課)鳥潟貞幸・米田隆彦・鈴木麻衣子

一年一回の発行(奥付では、四月一日)ですが、

新年度の四月から、毎月一回、編集委員会を開きました。その出席率が、ほとんど一〇〇%という驚異的な数字であったことが、チーム結束の固さを示していたように思います。企画立案の段階から皆さんのお知恵を結集し、さらに、原稿の依頼、欧文原稿の翻訳、座談会の企画・開催・原稿化、そして最後の校正に至るまで、みんなで手分けして協力してくださいました。特に事務局の米田隆彦さんは、「縁の下の力持ち」として、いろいろ細かで面倒な作業を、いつも確実に仕上げてくださいました。委員と事務局の皆さんには、心より御礼申し上げます。

## 五、新しい編集委員会の発足

平成十五年度には、次のような陣容で新しい編集委員会が発足し、『麗澤教育』第十号の編集に取り組んでくださっています。

平成十五年度 麗澤教育編集委員会

委員長 中野千秋(国際経済学部)

外国語学部からの委員 金丸良子・朴 勇俊

国際経済学部からの委員 土井 正・堀内一史

事務局(広報課)松下駿・鳥潟貞幸・鈴木麻衣子

中野委員長は、平成九年度(第四号)から小生とも一緒に『麗澤教育』編集に携わってこられたベテランです。新しいチームの皆さんと共に、きつと素晴らしい『麗澤教育』を編集・刊行していただくことでしよう。読者の皆さまも、これまで以上に、ご愛読とご支援を、よろしくお願いいたします。

## 編集後記

◆ 今回の特集に寄せられた先生方や学生達の原稿を読ませていただき、何となく煙たい存在であった「道徳教育」が少し身近なものとなりました。モラルハザートが指摘される昨今の社会風潮ですが、少々野暮ったくても大学創立の基本に立ち戻ることの大切さを共感していただけたらと思います。

(Y・K)

◆ 記念すべき第十号を無事に編集し終えて、ほっとしているところでです。本号は〈特別寄稿〉・〈オピニオン〉・〈特集〉・〈コラム〉・〈麗大の今〉の五本柱に加えて〈前編集長の覚え書き〉もご寄稿いただきました。ご執筆くださいました皆さまに心より御礼申し上げます。

◆ 本誌の編集委員会は左記のとおりです。委員長が交代したほか、金丸良子委員、土井正委員、松下駿広報課長が新たに加わりました。

◆ ご感想やご意見などございましたら、麗澤大学広報課までお寄せください。

(C・N)

麗澤教育編集委員会 (平成十五年年度)

委員長・中野千秋 (国際経済学部)

委員 (外国語学部) ・金丸良子、朴 勇俊

委員 (国際経済学部) ・土井 正、堀内一史

事務局 (広報課) 松下 駿・鳥潟貞幸・鈴木麻衣子

### 『麗澤教育』第十号

二〇〇四年四月一日

編集 麗澤教育編集委員会

発行 麗澤 大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ケ丘二―一―一

電話 〇四―七一七三―三〇三〇

印刷所 昌美印刷株式会社

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー